7951

西遊記

卷之三

桃川藥林口演
高島政之助速記

東京 文事堂發行

939
941

西遊記 卷三

桃川燕林講演
高島政之助速記

第一席

扨前々上り引續いて申上げます、萬歳山の五莊觀を立出でました悟空、筋斗雲の上で考へた、何處へ一番先に行かうか、……さうして聞いたら大抵知つてるだらう、殺す方ぢやねへ活す方だからは福祿壽の與かる所だらうと思つて東洋大海を經て蓬萊山へ行き、門の所へ來て　悟空「御頼申します　取次「イヤ是は齊天大聖何うして此頭此方へ御出なもつた　悟空「少し用があつ

て來たんだ、三星御在宅かい　取次「今三星で一杯飲んでる所だ
ございまし　悟空「一すさう言つて見んお、少し急ぎの用がわつ
て細みに來たのだから……　取次「少し御待ちあすつ……」と
早速に取次の者が右の次第を通ずると、福祿壽の三星は今丁度
酒を飲まうと云ふ所だ　三星「まア此方へ通すやうに……」と云
ふので悟空其所へ來たが還虛はあい　悟空「エヽ皆さん暫らく
でございました、何時も御機嫌宜しうございます　福星「何うし
た悟空、お前は何か依柴三魔と云ふ者と西天竺へ行くと云ふて
とを聞いたが　悟空「ソレが途中で酷い目に遭いましたので、豊
所方に聞いたら知れませうけれども萬壽山の五莊觀と云ふ所
に鎮元師と云ふ仙人が居りまし　三星「あれは中々剛らい者だ
悟空「剛い者だけれども賠い奴でございます、鎮元師の處に人參
樹がございまして、ソレが斯う〳〵斯う云ふ譯で大地へ埋つ

て仕舞つたんで、スルと怒もやアがつて、色々なことをしやがつ
て愈々仕舞になつて元の通り水を活したらソレで勘弁をしや
うと云ふのでムいまし、私くしは大抵なことはやりますが水を
活すと云ふことは知りません、何うでございませう、其所方三人
の中で人參樹を元の通りにもどることを御存じあら數ねてお聞
ひ申したいもので……　福星「ソレは往かない、法はある、法はあ
るけれども貪獸の類は回生の法と云つて再び活すと云ふこと
が出來るけれども何うも草木は往かん　悟空「ヘエー、ぢやア貪
獸の類なら一旦死んだんでも蘇生をして働らくが水だの草は
往かねへと云ふのだモ、仕方かねへお、何うか都合は出來ません
か　福星「都合は出來ない　悟空「さうでございますか、誰が知つ
てる者はございませんか　福星「何うも私は知らないな　悟空「
お前さんが知らねへッたつて……何うでございませう知つて

さうな人はありませんかネ、頼んで來るんだが……鍋が燒付き
ませよ、是だけ食つて仕舞うから……　福星「貴樣は話しをする
中に摘み食をしては往けない、何うだらう　壽星誰か斯う云ふて
とを知つてるだらう　壽星「さうさな、何しろ福星の言はつしや
る通り斯う云ふことは私共ぢやア往かん　悟空「往けませんか
な　壽星「先づ之を御有じでおらうと思ふのは南海の觀世音菩
薩だな　悟空「ヘエーあれは私ちの親分だが毎度行つちやア世
話にあるので大抵おことは親分の耳へ入れたくねへと思ふの
だが矢張親分の所へ行かなければなりませんかネ　壽星「何い
もさう云ふことは觀世音が能く御へて居なさるだらう　悟空
ちやア仕方がねへ、是から南海へ行つて親分に會つて聞いて見
るんだが親分が知らねへと云ふと……　壽星「何うも觀世音が
知らんと云つては仕方がない、先づ世界に知つてる者はなから

う　悟空「弱つたナ、餘り濕に障つたもんだから飛んだことをし
ちやつた、もう一杯飲んで行きませう　福星「誰も飲んで行けと
は言はない　悟空「何かい、若はこれつきりかい　福星「今あとから
來る　悟空「何をさう言つてやつたんだい　福星「オムレッに
ナッウだ　悟空「下らねへ物を食つてるな、シチウなんぞは美味
はねへ、何かもう些つと美味ものはないか、何しろ親分の所へ行
つて來やう、大きに御馳走樣、左樣なら是から南海へ行つて來ま
す　福星「行けるかい　悟空「行けるくつて雜作はない、腹が空つ
た所へ熱い酒を二三杯引掛けたから大層醉つた、雲の上へ寢あが
ら行くので　福星「落ちるな　悟空「ナニ滅多に落ちるもとはあ
りませんが居眠をもるとと落ちるんで、左樣なら御馳走樣、皆さん
へ宜しく……」と呑氣な奴で遙山を出ると再び觔斗雲へ乘つ
て走らして參り、南海竹林に至りまして　悟空「ヘイ今日は親分

お在出げすかへ　觀世音「悟空か、親分々々と言はなさんな　悟空「ツイ口癖になつてるものでございますから……　觀世音「何しに來たんだ　悟空「又何うも大變なことをやつちやつたんで、實は今蓬萊山へ行つて福祿壽の三星が知つてるだらうと思つて行つた所が誰も知らぬへのので彼奴等は白痴だ　觀世音「貴樣は人のあとを惡くばつかり言つてる、何が白痴だ　悟空「酒を飲んで居やがつて肝腎のことを知らぬへと云ふので　觀世音「何を聞きに行つた　悟空「實は萬壽山で斯う〳〵云ふあとをやつちやつたんで、御師匠樣までが油揚になつて仕舞ひ樣ならうと云ふ所で、ソレと同時に八戒や沙悟淨が丸揚になつて仕舞ひ樣うんで貴郎の前だけれども八戒のフライあとは食ふ者がありやアしない　觀世音「誰が食ふ奴があるものか　悟空「所が仙人の言ふには人參樹を活して返したら勘辨するぞと云ふので、何うでございませう、水が一旦死んで仕舞つたんでそが、ソレを活して元の通りにすると云ふことを御存じありませんか」觀世音「何故早く來ないのだ其位のことは何でもない　悟空「お前さんだから何でもなからうと思つたんだが毎度御厄介にあつて切手一枚持つて來たことはねへ、御世話にありッ放しで禮をしたあとがねへもんだから……　觀世音「貴樣は何時禮をする　悟空「其中にしますが、水を活す方は出來ますか　觀世音「出來るかとは何だ勿論容易いあとだ　悟空「ヘエー眞實でございますか、觀世音「如何にも吾が手元にある秘藏の瓶、其中には甘露水が這入つて居る　悟空「ヘエー甘露水ばかりで、氷水に密柑水はございませんか　觀世音「其樣なものはない、是れ世界に稀なるもの、此甘露水を楊柳の枝に浸して振掛ける時は必らず蘇生をする其水は活るに相違ない　悟空「ヘエーさうでございま

をか　観世音「併し水を起すのは誰が起す　悟空「ソレは八戒や沙悟淨に手傳はして起しますが何しろ死んで仕舞つたので仕方がございません、貴所御迷惑でも行てお呉なさいな　観世音「さう云ふことがあつたら行つてやらぬばなるまい、何しろ今晩飯を食つて行かうから　悟空「後生だ、家で食つて行かねいで途中で振掛でも食つて行つて下さい　観世音「其様なものが食へるものか　悟空「何うか早く行つて下さい私くしは嬉はないはれども師匠様が何うなることかと言つて甚大心配でございまを　観世音「イヤ三蔵は大方心配致して居るであらうから然らば其方同道して行け　悟空「ちやア御供をして参ります何分御願ひ申します」観世音菩薩に於ては恵岸行者を迎れ、恵岸行者は彼の瓶を負かつて参る、其中には甘露水が這入つて居りまを、悟空も再び雲へ打乗りましたるあとにして即ち其儘西遊山へ戻

り來りました歸りの遲いので大仙も大きに心配をして居りやす、又三藏始めとして何うしたかと思つてる所へ降りて來た悟空「何うも遲くなりました」三藏「此時に　三藏「何方へ參いつた悟空「ヘエ三島十洲を廻つて蓬萊山へ行つて福祿壽の三星に會つた所が奴等は知らねへので仕方がねへから南海の観音様の所へ行つて話しをして今彼處へ御出ぁさるのでございまを」之を聞いたから三藏を始め八戒沙悟淨、悟空も共に禮を施こす、所へ観世音菩薩御姿を現はし給ふ、大仙頭を下げたるあとにして元師「斯様なる所へ對し御出に相成り恐れ入りましたることで……　観世音「イヤ悟空の望みに任して此所へ罷り越した……悟空「悟空「御苦勞様でございまを　観世音「唯今其人參樹を蒔生せしめるであらうから早く其木を引起せ　悟空「ヘエ……サア八戒鉋卷をして……尻を端折つてよ、シッカリしねへ、積尾掛

が振下つてらア、馬鹿だお此野郎は……　八戒「俺ばかり叱言を言ふ何うしたら宜いのだ　悟空「大丈夫な所ぢやねへか、……沙悟淨何を愚図々々して居るんだ、見てばかり居やがる、……八戒もう些つと耳を片付けねへか　八戒「能く叱言を言ふな　悟空「當り前だ」忽ちの間大地に埋つてる其處の土を掻分けて漸うのことで其所へ取出した、悟空が術を施すと忽ち其所へ人參樹が上つて來た　悟空「ヤア上つて來た〳〵、上つて來たけれども往けない、死んで仕舞つた、何うか一つ親分……　觀世音「親分〳〵と云ふお」大仙此時に至り此樣子を見て居たが何うも斯う丸んで仕舞つたものは仕方がない、幾ら觀世音でも之を元の如くにはなるまいと必得て居ると、潺々たる水を其所へ取寄せたることにして其清水へ對して楊柳の枝を浸してスツカリ之を潤められ、ソレから彼の甘露を付けて頻りに此人參樹へ甘露を

振掛けまするとなんでも潺々として其水に於ては全然生れ變つたやうになりました、前々の通り二十六の人參果に於ては其枝に生じたる樣子、之を見るより鎭元師に於ては三拜九拜を爲したることにして實に觀世音の御德其通力の宏大なることに驚きました、三藏を始めとして何れも此所へ禮を施す、扨此人參樹が右の通りになりますれば別段に觀世音はお在遊ばす必要もなきゆゑに南海へ御歸りにならうとする、大仙早速に斯の黃金の盤手を取寄せたることにして元師自から此人參果を六ツ引落しまして觀世音を始めソレ〳〵へ之を饗應す、觀世音も快く之を召されれます樣子、何れも喜こんで之を食べる、三藏は其形狀赤子に似たりとあつて遠慮を爲してあつたる時に觀世音此所に來つて再び彼の人參果の上に甘露を掛けまするとゆゑ其形狀惡どく崩れ桃の如くになりました、三藏も大き

に喜こんで其儘に之を食して見ると其味いの美あることゝ驚だしく比喩にさへ甘露の味と云ふことを申します、其甘露を掛けてあるから實に類が落ちる程美味い、悟空見て居たが　悟空「親分方へ些と掛けてお呉んなさいな　觀世音「貴様はもう食つて仕舞つたぢやないか　悟空「甞めるので　觀世音「甞める奴があるか　觀世音に於ては茲に別れを告げ給ふて其餘にして惡岸を供に南方へ對して飛行をする様子を見て何れも之を拜し奉まつりました、扨鎭元師に於ては孫悟空を其所へ招いたることにして　元師「行者吾れ是まで普ねく様々の人に逢ふと雖ども御身の如く神通力自在の人に始めて殊に師へ對しての志しと云ふものは實に忠義莫大のものである、就ては先刻約束を爲したる通り今より兄弟分になり盃をしたへが何うだ　悟空「ソレは宜うございます、師匠様宜うございますすち、兄弟分にあつて私

しの舍弟分にしてやりたいと思ふので……○三藏之れを聞いて三藏「元師只今より悟空の舍弟にあるか。元師此の時に至たつて元師「如何にも迚も吾れ此悟空の術に及ばず即ち劣つたるものゆゑ吾れ兄とならんとは決して申さん、然らばと云ふのでソコで兄弟の盃をした、盃をすると悟空はスッカリ阿兄になつちまつて　悟空「ぢやアまア鎭元師何だぜ、是れから氣を付けて……元師「何を氣を付けるんだ　悟空「能くねへ、あんな鍋あんぞは賣つちまへ、あゝ云ふものがあるから人を無闇に殺して往けない油は何處から持つて來た……　井善「から勘定はやりやアしめへ　元師「ウム勘定はまたしおい　悟空「其様なあとをしては往けない、早く勘定をして仕舞ひな、大きな鍋だな、其様なものは下金屋叩き賣つてシャッでも買ふが宜い。大きに御世話だ、三日の間此所へ滯在をして居りまも時に鎭元師に於きましては飯に

三藏法師の德を慕ひ、殊に悟空の術を恐れ、恭々敬服し致しまするから茲に大厨の饗應を爲します、されども此方に於ては面天竺へ參りまする望みあることでございますから茲で別れを告げまする、途中十里餘と云ふものは鎭元師送り來りましたが茲で鎭元師に別れ三人の徒弟を連れて依然三藏に於ては遂に西方へ廻きました、然る所が八戒の腦骨に依りまして斯ばかりの三藏一度孫悟空を懲らし致すと云ふ一條に相成りまそ

第二席

三藏法師は萬壽山を立出で、三人の弟子を連れ龍馬に打乘りまして西方を指して御出に相成りました、茲に四五日の日を重ねまする間別段に申上げることもございませんが、所が一日山の裾に通り掛り彼是れ晝過になりますのに一軒の家も無く、何分時への食物もございませんから大きに三藏も之には困りました、悟

空を招いで　三藏「行者悲とく餓えたるが何か食する物はあるまいか　悟空「左樣でございますか、何うも飛んだ所へ掛りました、餘程人家の乏しい所と見あて、從がつて食物もございませんが、一つ私くしが參つて何か食物を覓ねて來ませう、何處へも御出あそつてはありません、此所に少し御待ちあさるやう……八戒も沙悟淨も御師匠樣を能く守護して居なさい、斯う云ふ所だから何が來るか知れない　八戒「よし〳〵ぢやア阿兄何分頼むぜ、何うぞ五人前はど頼むから……　悟空「何だつて八戒五人前要るんだ　八戒「御師匠樣が一人前、沙悟淨が一人前、俺が三人前食ふのだ　悟空「馬鹿野郎食ふことと云ふと先に立ちやアがる悟空忽ちの間雲を起し此雲に打乘りまそると食物を搜さうと云ふ必得で出て行く跡へ殘つて　八戒「御師匠樣何うも何でございまそお阿兄も宜いけれども行者は何うも吃言ばかり言

つて往けません　三藏「北方尊は行者には迚も敵を以ても及ばず、彼は十分の働らきをするから叱言を言はれても仕方がない　八戒「さうでございますかね、言はあくつても宜い叱言を言ふので私くしのことを馬鹿だ〳〵と申しまして、御師匠様の前でそけれども俺だつて醜い馬鹿ぢやアない、ナア沙悟淨　悟淨「さうさ併し貴様は餘り恰利てもあいよ　八戒「アレ……　悟淨「第一貴様は女を見るとダラシがあくつて唾を流したり、目を細くして耳を垂らして仕舞つて面を崩す　八戒「馬鹿を言へ面を崩す奴があるか、何處へ行つたんだらう、大層長いぢやないかと言つて居る所へ年の頃十七八にあります女、美なる服を着用いたして籠の中に果物おとを澤山に入れて之を提て參りました　八戒「オイ悟淨見ねへ、何處からか女が來た。那の女三藏を見ると禮を施こしましたることで　女「貴僧には何方へ御出に相成ります

るか　三藏「貴僧は唯今より西方へ趣むく者だ　女「左様でございますか、今日は手前の父の忌日に當りまする所、幸ひにして御僧に御目通りを致しまして供物を供へんと存じまして罷出でました、サア何うぞ之を御上り下さいまするやうに。と二つの籠を其所へ取出だした、一ッの籠には果物が澤山あり、一ッの籠には食物が澤山這入つて居る、三藏は此様子を見て　三藏「是は何うも奇特なることと、八戒沙悟淨　兩人「ハッ　三藏「是なる少女吾れへ對して齊飯を與へると云ふことだ　八戒「何うも有難う存じます如何様年十七歳でございますエ　女「イヽ當年十七歳で八戒「十七てげすか何うも美い御容貌て御良人でありまするか女は嫣然笑いまして　女「自らは左様な者は來だございません八戒「エヽ何でげそか御良人も何にもあくて十七でございます　な、只の十七でございますか。當り前だ一百十七で堪るものか、八

戒直様ソレを取つて三藏に與へやうとする三藏も飢えて居る所へ食物を與へると云ふのでございますから此上もなく喜ぶんで既に手を掛けやうとする時に遽かに走りましたる所の悟空、通力自在の男でございますから雲間より此様子を見て大いに驚ろき、ブツーッと一陣の風諸共に其所へ引返した、アレと見て居る其時に突然耳の中より取出したる如意棒を一振振つたるゐとにして彼の女をブウーンと打つた何かは堪りませう忽ちの間其所へ打倒し女は一聲叫んだおりに其儘に落命を致した様子、三藏も大きに驚ろいたが沙悟淨八戒の二人も呆れた女は其場に至つて粉の如くに相成つた　悟空「御師匠様ア、危ないことでございます……何だつて貴様達は御師匠様に此様な物を上げるのだ、ソレだから言はねへゐとちやおい、あの位ゐ俺が言つといたぢやねへか、此女は怪物だ今御師匠様の召上ら

うとして此食物と見えるのは皆な毒虫だ、又果物のやうに見えるのも毒だ、貴様達は通力が足りないからソレが分らねへ、通力が足りないと思つたら何にせへ御師匠様に召上がることはありませんと言つて御留め申すのが本當だ。三藏之を聞て　三藏「悟空「是は變化か　悟空「エヽ、昏物で、察する所此近所は怪物が多いと見えます　三藏「おれも女の死骸……　悟空「イヤ是は貴所方の御目には斯う見えますが私くしは七十二般の變化の術を知つて居る申すと慢じたことを言ふやうでございますが、八戒や沙悟淨とは違ひます、私くしの目で見れば怪物でございます、御師匠様は道德の僧おりと雖ども未だ其術を御存じないから女のやうに見えるので……ソレ御覽じろ、ソラ〳〵指差をするから三藏様子を見ると今食さうと致しました彼の籠の中の物が變らず蛙でございますその成は蛙おゝと生きて居るの

われば死んで居るのもあつてソロ〳〵逃出した三藏法衣の袖を顏にお當て遊ばしたることにして　三藏「是は何うも……」悟空「だから八戒氣を付けろと云ふのだなを見ると面ばかり崩しやアがる　八戒「黙ろいたて是は……」　悟空「俺が食物を持つて來るから其間御師匠樣の番をして居る。ボカー〳〵拳倒した」八戒「痛いな何うも其戒ダラリと下つてる耳の上を打たれた　八戒「痛いな何うも其儘に致して悟空、二人へ確と言付けて再び雲を起してソレへ乘つた人間馬鹿に限つて人を恨むもので　八戒「悟空奴阿兄振つて人の頭をボカ〳〵打つて貴樣は通力が足りあい〳〵ナニ足りないみとがあるものか、悟空程の通力がねへからつて怪物は怪物だ、俺も只のものぢやアねへ、イヤ是は女に相違ねへ……」御師匠樣何うも怪い奴は行者でございますな　三藏「何が怪い八戒「行者は成程變化の術を心得て居りますから斯う云ふこと

をして見せる、八戒是は全たくの女でございます　三藏「さうか八戒「エヽ成程持つて來た物は此通り何か毒虫のやうに見えますが是も彼奴が變化の術で毒虫のやうに見せるから御師匠樣の御目には毒虫と見えませう私くし共が見れば果物は果物飯は飯で貴僧が道德の僧にして剛い御人ではあるけれども其術を御存じないから悟空宜みとにして貴僧を瞞着して居るので第一人を殺そのを此上も無い惡みとして居る孫悟空、御師匠樣何でございますを是から先き悟空おどを連れて御出なさいまそと彼が致したことが御師匠樣の身に及ぼそやうなみとになりまそ、私くしは悟空が此先御供をして惡るやうでございますと御免を蒙むらなければありません　三藏「フーム是は全たくの婦人か　八戒「全たくの婦人だつて、御師匠樣御覽あさい變化なら生きて居る時は術を施こして女にもあり、老婆にもなり老婆

にもなりますけれども死んで仕舞ひますれば固より其術に離れまをるものでございますから狐おら狐、狸なら狸、何でも其姿を現はを留でございます、此女は殺してから幾ら時が經ちましても姿が少しも變らないおやアでございませんか是れ全たくの女で、御師匠様へ對して齋飯を參らせやうと言つて來た者を殺してさうして自分は樂みにして居て、貴僧を欺いて怪物だなどゝ言ふのでございまを　一　三藏「フーム言はれて見ると三藏は已れ肉身凡体にして未だソレを見分けるとを御存じないからハテな、さう言へばさうかしらと少し迷ふ、八戒は何うも此間から叱言を言はれたり嘲られるものだから之を恨と思つて時があつたら放逐させやうと思ふ了簡があるから言葉を續けて様々に譏言をして居る、沙悟淨は側に居たがさう云ふ譯ではないとも言へず、將へて居る所へ向ふから年の頃五

十四五にもおりませうが一人の老婆食物を持つて其所へ立出でまして　老婆「旅僧其所にお在でございまするか、唯今娘に齋飯を持たせて參らせましたけれども御不足ではないかと心得まして又々持參を致しましてございまする、今日は手前の良人の命日でございますから……と云ひながら其女の死骸を見たる老婆大いに驚ろいて　老婆「アレ淺ましき有様、何で斯様なことをおされましたか貴僧自ら御手を下して我が娘を御殺しなされたか。と言つて其死骸へ取縋つて泣伏した、三藏之を見て氣の毒に心得　三藏「イヤ〳〵老婆中々野僧に於ては殺生戒を破りなど致する氣遣ひはない、全たくソレは……　老婆「イエ縱令貴僧の爲に打たれ殺されましても決して御恨みとは存じません前世過去の宿業と心得て居りますれば恨む所もございません、併し手前は齋飯を參らせやうと心得、持參致しましたるもの

サア切ては之をお上り下されまもやうにと美味さうな物を其所へ出した、悟空八戒に於ても娘の死骸を見て慨く中にも此食物を與へると云ふのは實に此老婆道德の者ありとあつて三藏へ參らせやうとする、三藏も腹が空つてるから之を食さうとも思る、雲間に樣子を見て居りました悟空ブウーッと再び其所へ降り來りたるかと思ふと突然に如意棒を取出して彼の老婆をヒシーリ打つた、何かは堪りませう一遍にして其所へ打倒し續け打ちに打ちましたから恰然老婆の身体に於きましては鹽辛のやうになつて仕舞つた　悟空「八戒馬鹿野郎……沙悟淨何の爲に師匠樣の側に付て居るんだ、今言つたゝを今忘れて仕舞つて、此邊は怪物が多い所だから萬事氣を付けろとあの位言つて置たぢやないか。突然八戒の頭をポカーリ擲倒した　八戒「痛いな何うも……」

悟空「師も此上共に御用心遊ばして下さいまし　三藏「フーム、悟空是も怪物か　悟空「エヽ、是も怪物で斯樣に老婆の姿に化して參ました　三藏「フーム　悟空「此鹽梅では私しは何處へも行ますまい御側に居まして　三藏「イヤ〳〵さう事が極れば此所へ來る者何を進ても決して食しさへしおければ宜しい其方何うか淸淨ある物を調へて貰ひたい又兩人此所に居れば藥を以て打たんとする時には八戒沙悟淨の二人之を留め支にて與れるに相違ないから行者は少しも早く參つて食物を求めて……

悟空「イエ參りまそるが此鹽梅では まだ出さうでございますから併し仰せを背きは致しません……

乾度言付けたを此馬鹿野郎返事をしろ　八戒「今返事をそるよアヽ痛に阿兄も宜いけれども力が馬鹿にあるものだから其度々にゲワン〳〵言つて涙が出らア　悟空「馬鹿野郎又一ッポカーリ　八戒「もう澤山だよ、悟空其他に致して雲を起して行く八

戒振返つて様子を見ると老婆の死骸と女の死骸と二つある

八戒「御師匠様私くしは迚も孫行者と一緒に西方まで御供は出来ません自分の強いのに慢ぢて迚も非も無く人の頭を打つのだ是も怪物ぢやないのです……

三藏「怪物ではない……八戒「今申上げる通り十分でも十五分でも時間が経ちますれば化して居りませもものから必ら此姿を現はそに相違ないので然る所が此通り幾ら経つても女の死骸は女の死骸老婆の死骸は老婆の死骸でせうさうして見ますれば別段何も怪しいとはないではございませんか　三藏「フーム　八戒「食物たつてさうです貴僧が空腹だらうと思つて美味さうなものを澤山持つて来たんでそソレを菲だ〳〵と言つて無闇に私くしの頭をポカ〳〵殴打る自分は人を殺すのが樂しみだと平常言つてるので……

三藏「フーム。三藏もソレを言はれて見ると然うかしらと

思ふ八戒は自分が打たれたり何かして居るものだから此恨みに尾に尾を付けて色々讒言をして居る所へ一人の老人四五人の供を連れて其所へ通り掛りまして三藏の様子を見るより老人「是は御僧其所にお在にかつたるか是は聊かの物ながら齋飯を参らせると言つて名々携さへて居りましたるは食物でございまして之を差出しまする様子でございますから三藏食べて宜いか食べて悪いか知れんと思つて居る内に八戒でも沙悟淨でも　兩人「御師匠様折角でございますから……老人が呉れるのでございますから……

三藏「さうか。と言つて今や之を食べやうとすると又ブウーッと風が吹いて来た八戒跳を押へて〳〵八戒「又打たれる〳〵其儘へ飛込み来りましたる孫悟空忽ちの間如意棒を取出し彼是れ二間ばかりの棒にしてブウーンと風を切つたるあとにして老人始めとして供をして

居たる者を片端から打殺を様子逃げんとすると雖ども逃ける
あと能はず見る〳〵間に七八人の者を打殺して血染になつた
る如き棒を提げて突立つたる様子三藏は法衣の袖を震はして
居る悟空大音を揚たるあとにして　悟空「師は何ゆゑに斯ばか
り卑しき御心を出し給ふぞ此邊閻王の多き所なれば心付け給
へと申せるのに只管食を求めんとして若し大事に中つたる時
は如何おさる恩しき八戒や悟淨の嗣を信じて何故あつて斯樣
ある物を上らんとするか　三藏「フーム　悟空「是れ即ち何れも
怪物に相違なし　三藏「行者汝只管に怪物なりと申せと雖ども
吾れ見る所に於ては何れも人間としら見ゑん　悟空「ソレは今
申す通り術を御存じゆゑに左樣で吾は此所に於て師の迷
夢を覺させんと口に呪文を唱へてフツーッと多くの死骸に對
して息を掛けると道は抑も如何に何れも狐狸樣々の姿に相成

つた愈々三藏驚ろいたけれども此二人の女は未だ其姿が悟空
には變化と見ゑるが三藏には見ゑない是等も術を以て如何樣
女に變へて居るものと見ゑる　悟空「御師匠樣如何で　三
藏「ウーム何で此女二人は此處に居るか　悟空「イヱ御目には女
二人と見えしても中々さうではないので是は何方も此の怪
物でございます悟空熟〳〵とソレを見て居る中に八戒は三藏の
御耳の側へ口を寄せて何やらゲヾ〳〵言つてる三藏は御聲を
發し給ふたることにして　三藏「悟空如何に汝吾れを欺り己れ
の術を以て食物を出と雖じ或は唯今打倒したる者の姿を斯樣
通力を以て變へ却つて心を宥めんとすると雖ども見る前に殺
生を爲す北の方左樣な者は今より西方へ問道をすると思いも依
らぬ唯今より出當を致す何方へなりとも行け　悟空「エヽッ左
樣あら此悟空御供は申いませんか　三藏「あらぬ經つて其方見

角申さに於ては吾れ緊箍呪を唱へる　悟空「イヤ緊箍呪を唱へて下されば手前の身体粉の如くに相成りますから……勘弁を乞る供はならぬと仰有れば、ソレまでのこと併し師は名僧にして徳有る御方ではあるけれども愚なる八戒の言を用うて此悟空を此場に至り御見捨になりまそか手前は是非に及はず此場に御別れを申し水簾洞へ立帰りまそれはソレまでのことでございまするが此行先は是れどころではございませんぞまた〳〵怪物が澤山居るに相違ございません其中を通行をして釋迦如來の御手許へ行かんとするのに八戒沙悟淨の如き者のみでは迚も生命は如何かと必得ます位願はくは御供に御連れ下し置かれたく……　三藏「默れ何様相願むと雖ども其方に供させるみとはならん殺生を樂しみと致そやうな者唯今より勘當をそる行け如意棒を怒まちの間耳に響めて悟空大地に手を突き

涙を下げて居りましたるがホロリと涙を流し　悟空「是非に及ばざること手前の術を以て樣々に是まで御助け申上げたるのに愚の八戒の言を信じ給ふて私くしを御暇となるからは是まで なり重ねて申上げるに於ては却つて御心を損するやうなるもの又緊箍呪を唱へられては手前も難儀致しますれば茲に御別れを致します……沙悟淨「此處へ來い。悟淨其所へ出て來て悟淨「誠に阿兄飛んだことになつて仕舞つた　悟空「八戒から見れは貴樣の方が少しは物か分るから言つて貰くが是から御師匠樣を氣を付け乃宜いか、で万一恐ろしい怪物にでも出會つて御師匠樣の御身の上が危い御命が危いと思つたら大きな聲をして齊天大聖孫悟空來つて助けよと呼べ汝も其位の術はあるだらう天地に響くやうな聲をして呼べ吾れ其聲を聞かば縱令勘當されて居ても必らず行つて師匠樣を助けるから……　悟

遅ちやア阿兄愈々と云ふ時は怒鳴るから來て呉あければ困るよ　悟空「必らずや行く八戒が危いことがあつたら打捨つて置けあんな者は殺して仕舞う方が宜い。八戒聞いて居たが　八戒「又始めやがつた　悟空「悟淨貴様に委細のことを頼むから御師匠様を何うか大事にして……　悟淨「阿兄もお大事にあそつて是から何處へ……　悟空「何處へと言つて外に行く所はあい薄果山水簾洞へ歸つてさうしてまア小猿でも集めて鍛練でもして又た時機の來るのを待たうと思ふ……ソレでは御師匠様のお言葉に從がひまして參ります　三藏「早く行け長居をすれば此方は致しません誠に是まで悪いと分には捨置かん　悟空「長居は致しませんを致しましたり又御師匠様に助けて戴いたことをでございます然らば是れが御別れでございまする。と孫悟空はホロリと涙だを流し悄然として傍らへ觔斗雲を引いて此の雲へ乗つて其儘

にして薄果山水簾洞を指して行く、跡に殘つた八戒　八戒「ワハヽヽヽ、笑ひ出した　八戒「御師匠様もう御心配なさいますなヘエー孫悟空が一人位居なくなつたとて私しが付て居ます私くしも只の八戒ではございません、阿兄は無闇に人を殺すのが樂しみだと言つてるんで可愛想に女あんぞを殺して仕舞つて此女あんぞは殺すべき女ではないので、沙悟淨と私くしが付いて居りまそれば大丈夫でございます　三藏「此上共に八戒必らず油斷致そな沙悟淨も其通り　悟淨「エヽ宜しう御座いまそ。と言ふやうなものゝ是までの間、彼れ五行山の岩の下に在つたのを觀世音の手引に依つて彼を助け、今日此處へ來るまで彼を現はし又彼が志ざしを段々く味はつて見たる所が悟淨八戒に勝ること遥かでございます、其孫悟空を手離したるのでございまそから依奘三藏法師に於ても何とあく心細く思はれたが、イ

ヤ〳〵是ではあらんと思召して茲で氣を取直して飢えたる腹を抱えて西方へ御進みになる、悟淨八戒お後に付いて行く、時に御話別れて孫悟空一度華果山水簾洞へ歸りまそるの一條に相成りまそ、

第三席

振返り見返りながら孫悟空は華果山水簾洞へ歸る、既に奥へ入らんとすると小猿が彼方に三疋此方に二疋と漸う二十疋ばかり居りました、悟空の姿を見ると名々喜んで　小猿「アヽ頭歸つてお呉んあそつたかい、何うも大王が居ないものだから水簾洞は空店同樣になつて仕舞つて何することも出て來ません　悟空「何だ此奴等は俺が居ねいからつてあの通り大勢居たぢやねへか、水簾洞は何した　小猿「何うしたつて此頭は獵人が此處に私共の居るあとを知りやアがつて、三十人も五十人も圍まつて來て取捉めへちやア殺して仕舞う、殺して食ふやら何やら獵人の邊に酷い目に遇つた、ソレで私し共は水簾洞に居られませんからあちやつて人に知れねへ水の淺つて居る所へ隱れて居たり何かをするので實に大王の居あそつた時とは違てまるで形あしでございまそ　悟空「フーム何か俺が不在にして居る中に近所の獵人が來て皆な殺されたと　小猿「何うか頭耐敵をしてお呉んあさい、五人や八人ぢやアない、ので彼是百四五十人捕まつたんでソコで殺て食う奴もあれば兩國へ持てつて豐田屋(獸肉店)の前へ振下つてるんて　悟空「さうか少し不在にそると直に其樣あことをしやがる、宜し〳〵俺が敵討をしてやるから手前達ばかりか　小猿「兄弟分は迚も性かねへと云ふので外へ逃げて仕舞つたんで、頭でも歸つて來て水簾洞を當との通りにして下されば又來やうと云ふので何處か〻へ引込んで仕舞つたので私し

其は何處へ行たくつてもソレだけの術が無いので仕方がございませんから唯隱れて居りますと言つてる所へ、ブウー〳〵ドン〳〵ブウー〳〵ドン〳〵鑼を鳴らし太鼓を叩いたることにして追々其所へ乘込んで來る獵人彼是七八十名水簾洞の小猿狩をしやうと云ふので其所へ乘込んで來た樣子　小猿「頭わのりだ、大勢來ますから何うかして下さい、何うか大王助けて下さいと。一同の小猿が手を合せて拜んだ樣子　悟空「よし〳〵他が今一遍に打殺してやるから見物をして居ろと言いながら山の上に登つたるあとにして孫悟空身の丈三丈ばかりにして大音を揚げ　悟空「如何に獵人此水簾洞に至つて吾が手下の小猿を惡とく縛したりとは憎い致し方、小猿の敵覺悟をしろ。と忽ち口に呪文を唱へて息を吹いた、すると大風が吹起こりたるあとにして、この山に於ては固より石山でございまして小石が積上げてある、ソレを大風の爲に吹散しまをから何かは堪りませう、忽ち獵人の目口へ這入り又は此石に打たれまする者幾人と云ふ數を知らぬ兎角する間に悟空神通力を現はして到る獵人一同を殺して仕舞つた小猿は之を見て居たが　小猿「何うだい大王が歸つて來ると是だ　悟空「サア〳〵是で宜い、もう獵人は皆お此通り死んで仕舞つたからもう再び此所へ來ると其樣あとは構はない。直に是から廻とはなし、又殺人來たつて其樣あとは構はない。直に是から廻狀を廻して呼ぶ又は電信電話で集めたらうと思ふので、ソコで一旦は退散をした者も段々歸つて來る忽ち此の間に水簾洞は舊との通りにありました、悟空は此處に居りまして齊天大聖孫悟空と云ふ幟を立つて多くの手下を集めて毎日のやうに酒を飲んだり、或は一同の小猿を指揮して訓練あそをして居るやうあものゝ、心の中には、アヽ、師匠は何うしたか知らん、首尾能う西

方へ行ければ宜いがと固より致して師を思ひまをる男でございますから其事ばかり考へて居る、お話別れて茲に伝奘三藏法師は悟淨八戒を連れまして、龍馬に打乘り悟空に別れてから七八日の日を費やして參りまする間別段にお話もない、スルと又何うも物の乏しい所へ參りました、廣漠たる原でございまして、左方を見ると赤松林、赤松の林だ、何うも大層景色の美い所へ來たがもう豊だと云ふのに食物がない　三藏「何うも飢えて難義を致すが八戒食物を尋ねて來て貰ひたい　八戒「宜しうございまして、私くしが行つて參りまし、……ちやア悟淨待つてろ俺が行つて何か食物を持つて來て御師匠様に上げるから　悟淨「八戒ッレは宜いけれども貴様又途中で眠て居ちやア往けない　八戒「馬鹿を言へ眠るどころぢやアない。出て行つたなりに歸つて來ない、三藏と悟淨の二人待つて居たが何分にも待遠でならない

松の根下の所へ馬を繋いで笠へ腰を懸けて煙草などを召上がりながら待つて居た、沙悟淨は退屈をして　悟淨「御師匠様疾うに歸らかければならないのでそが彼奴又何處かで女湯でも覗いて居るのでせう、一寸行つて様子を見て參いりますから……三藏「アヽさうか何分宜ろしく頼む　悟淨「宜ろしうございまして三藏「言ふまでもないが怪物が出ると宜しくないから何うぞ早く歸つて呉れるやうに……　悟淨「エヽ宜しうございまして決して御心配なさいますな、ソンなに遠方へ參る譯でもなし直に戻つて參りまをから……。と沙悟淨は熊手を提げ其儘八戒の後を追うて雲へ乘つて行つた、又三藏は心細くなりまして、両人が居なくなると御自分と馬だけのことでございまして、何うも行つたきり歸つて來ないから何をして居るかと、ソレまでの間は唯四邊の景色を見て居しが南の方を見かつたものと見える、始め

て南の方を振返つて見ると何うも七堂伽藍とでもやすやうな大寺殊に寶塔は雲間に聳えて實に目を驚ろかすばかりの有樣三藏之を見ると立上がりまして三拜をおしゃ三藏「アヽ吾心付かざりしに斯ばかりの大寺之れあるか寶塔を立てたる有樣を見れば餘程大寺と覺えたり、先づ此所へ參り佛体を拜し一遍の回向を致さばや。」と荷物も馬も其所へ置いて、寶塔を目的に致して參りました見た時には一寸前にあるやうだが扨歩いて見ると稍々十七八町もありまを、來て見ると大層立派だ、表を見ると額が懸つて居りまを、碗子山破月洞といふ所であるか、兎にあれ。」と思ひましたから其儘門へ來つて見ると閉してあります、尤とも潜りの方が開いてるから潜りから這入ると遠方から見た時は大層の寺のやうなが門内へ這入つて見ると何うも荒果てゝ居ります　三藏「是は何う云ふてとか知らん門の内へ這入るまでは立派な寺と必得たが門内へ這入つて見ると斯る有樣……。スルとグヮー〳〵と云ふ恐ろしい喚が聞える、扨はと心得たから其喚が聞える方へ參つて見ると寶塔の傍らでございまして石壁になつて居りまを其石の上に横たはつて居りまそのは彼是れ身の丈は九尺もあらうかと云ふ寐て居る姿を見ますると全然猫の如き有樣身の毛もゾッと震ふまを位三藏其儘に逃け歸らうと致しましたが身体縮んで歩む能はを唯ブル〳〵震ゑて居ると彼の者驚て喚を止めて兩眼を開き三藏の姿を見るが否や起上がつて突然襟首の所を押へてグヮーッと其所へ引いた　怪物「ヤイ何だ貴樣は……」　三藏「愚僧は唐朝より致して帝の勅命を受けて西天竺大雷音寺へ經文を求めに參る者、必らず怪しいものではござらん、當山寶塔を拜見致し佛体を拜し、一遍の經文を唱へや

うと心得て參つたり何卒許し給へ　怪物「默れ汝此所へ來つて吾が寐姿を見たであらう　三藏「イヱ決して……　怪物「イヤ見た吾れ寐る時は其本体を現はす、其寐姿を汝に見られたるからは許す譯にあらぬ、唐僧とある眼を肥さん、……ヤア〳〵若共來れッ。と聲を掛けるとバラ〳〵ッと小怪物が七八人出て來たかんから斯樣な者が這入る、是は西天竺へ敎を取りに行く僧だまだしも是には供をして來た奴があるだらう、貴樣一人ではあからう　三藏「二名の同伴がございます　怪物「何と云ふ　三藏「一人は沙悟淨、一人は八戒と申する者で……　怪物「ソレは何うした　三藏「唯今食を求めに參りました　怪物「ア、何か赤松林へ參つて食に乏しいが故に食を求めに行つたして見れば今い來るに相違ない、……コレ此坊主を縛つて奥へ繋いで置け、俺は

眠いから今一寐入りやる汝等は門前に扣ゑて八戒沙悟淨と云ふ者が參つたら捉へて三人一度に食つて仕舞から……　三藏「ヤア許し給へと言つたが何しに許すべきか忽ちの間小怪物飛掛つたることにして三藏をグル〳〵卷に綿り上げた奥へ連れて參りまをると立木の下へ之を縛り付けた樣子、三藏如何共致し方がない彼の怪物はまだ眠いと見ゑて再び石の上へ横たはりまをるとグウー〳〵寐て仕舞つた小怪物は門内に扣ゑて今に弟子二人が來たら之を取押へ其上に大王に上げ餘つた骨を自分達が嚙らうと云ふ心持で小怪物は其所に扣ゑて居る御話別れて沙悟淨は　悟淨、何うも馬鹿は何處へ行きやがつたんだらう本當に彼奴のお蔭で苦勞ばかりして居る、此間悟空が別れる時にさう言つた、八戒の野郎を連れてつちやア愈々厄介だと言つたが成程厄介だ。悟淨口叱言を云ひながら來ると草叢に

グヴー〳〵寢て居る奴がある、から來て見ると八戒の野郎だ、悟淨いきなり耳を引張つた　八戒「ア、痛い〳〵何にをするのだ　悟淨「何をするもねへものだ何だつて寢て居るんだ　八戒「何だつて寢て居るつたつて食物を捜しに出たんだけれども此近所に家なんぞはありやアしない餘まり疲勞たから少し寢て居たんだ　悟淨「貴樣が餘まり遲いから御師匠樣を一人置いて見に來たんだ早く歸らなければ往けないぢやねへか　八戒「弱つたあア　悟淨「食物に有付いたか　八戒「有付きやアしねへ　悟淨「唯寢て居たのか　八戒「ウム　悟淨「さう云ふ馬鹿だ、サア行きねへ〳〵、早く歸つて御師匠樣にお詫をしなければ仕方がねへ、又二十里でも三十里でも行つて食を捜して差上げる此樣な所へ御出き申上げて万一のことがあつたら大變だ　八戒「大變は大變だけれども……アヽー眠い〳〵　漸やうのことで元の所ろへ

來て見ると馬は松に繋いでありに荷物は其所に投出してあるが御師匠樣が居ない　悟淨「ヤア居ないぜ　八戒「コイツは驚ろいたな何うも……　悟淨「サア大變なことが出來て仕舞つたと南の方を振返ると寶塔があるから　悟淨「かゝ是は御師匠樣はあの寶塔を目當にお出でおすつたに相違ない跡を追つて行つたら宜からうとソレから二人は熊手を提げたことにして一生懸命逐掛けて參りましして彼の碗子山の破月洞と云ふ額の所へ來りまするとバラ〳〵ッと現はれ出でましたる小怪物大勢　小怪「其所へ來ッたのは悟淨八戒といふ奴等か最前より汝等の來るを相待つたり此破月洞に在する黃袍郎と云ふは即ち吾々の大將なり吾等其手下として汝等の來るを待つたりいざ縛常に繩に掛れと刃物を取つて向つたる所八戒悟淨カッ〳〵と笑つたることにて　悟淨「汝等の手に乘る吾々ならず扨て

は御師匠様は取り押へにかつたるかサア來いと云ふと旋手を廻して打つて掛る様子心得て小怪物七八人悟淨へ打つて掛りました然れども悟淨には叶いません見る〳〵間に四五人を其所へ打倒したので小怪物は其由を早くも奥へ來つて注進を致したり此時に黄袍郎と稱へる即ち此中の大王大いに怒つたることにて其義ならばと云ふと鈴を捻つて其所へ飛出し　黄袍サア來いと云ふと悟淨を對手に打合つたり悟淨に於ては何程のあとやわらんと心得て之と打合い八戒に共に打つて掛り二人と一人で爭つて居たが此奴頗る者と見えましてさしもの悟淨八戒に於ても少しく危く見えたけれども先方に一人此方は二人暫時やつて居ると八戒考へやがつた是は俺は迚も往けねへ悟淨に任して置いて沙悟淨と打合つて居る中に先方が勞れる所へ出てやらうと思つて烈しく打合をして居りながら　八

戒「悟淨々々サア大變だ小便所へ行きたくなつた　悟淨「此馬鹿野郎　八戒「漏るやうになつたから少頗むせ。強てのことでございますから　悟淨「ぢやア早く行て來い、俺が一人で引受て居るから……　八戒「ぢやア頗むせ。と野郎一旦此場を逃れやがつた　悟淨「此馬鹿脆て森の中へ逃入つて　八戒「危ねへ〳〵今の所ぢやア迚も叶はねへ、悟淨がやつてる其中に勞れた所へ飛出さうと思つて退いたまでは何事もなかつたが奴め森へ逃入つて又々ジウー〳〵寢て仕舞つた、悟淨は二人で漸く對手をして居た所が一人になつたものでございますから忽ちの間ブラーレと打込んで來た鈴のために熊手を打落した、之を取らうとする所を飛込み來る黄袍郎悟淨の襟髮を押へてブウーッと引いてアッと云ふ中に叩き付た、善通大抵の者なら其儘粉の如くになるのでございますが流石に沙悟淨漸うに一命は助かると雖ども大勢の

者其所へ來りまして忽ち悟淨をグル〳〵巻に縛上げて是は奥の櫃の中に入れて置いた　黄袍「何うした、もう一人の耳の長い奴は……　小怪「何處ぞへ參りました　黄袍「何處へも行る氣遣ひはない、再ひ此所へ來るに相違ないから參つたら取押へろ　沙悟淨は生捕にありまして奥深き所の牢のやうな中へ投り込まれて、三藏は細目に掛り松の木の下に縛されて居たが涙を流し、ア、情いことだと、茲に至つて彼の怪物の爲に食はれることかと思つて居ると、ミシリ〳〵と側へ來る者があるから扨は吾を食ひに參りたかと思つて樣子を見ると年齢二十二三になりまして餘程美婦でございまして　婦人「貴僧定めし御驚愕であらう、唯今御助申さるから氣を確かに御持あさるやう　三藏「ハイ其許に當家の御細君でございるか　婦人「されば手前に於ては是より西の方三百里を隔て寶象國と申る國がございて其國王何

某の娘……　三藏「ハヽア國王の娘が如何なせばとて斯樣な所へお在にあるか　婦人「されば此處の主人と云ふ者は即ち怪物で唯今を去る十三年以前に此怪物の爲に遂に殺され此所へ來り歸らんとすれど歸しもせず、恥かしがらせ其怪物の爲に此身を泣せ遂に二人の子供が出來て二人の子供を設けて見れば今更歸り去ることにもわらず、又其變化吾を愛すること一方からなれど如何に變せらるゝと雖ども兩親のことを思へば一日として心安んずる暇も無く、然るに今日貴僧斯ばかりの難義に出合はれしは誠に氣の毒なり依つて今より御身を助ける主人如何樣なることを申すと雖ども自からの舌を以て魔王を欺いて御助け申し又御弟子方も御助け申して進上をる、其代り是より西天竺へ御出にあると云ふは先刻承知致したり其西へ御出になるのを幸ひ寶象國を何れ御通りにならうから其時に國

王へ對して吾れ獨て父の所へ進じたしと思ひ認め置いたる書面がござるから此書面を持參をして下さい國王兵力を借つて此所へ來り吾を助けて再び寶象國へ案内をなし呉れまするやう願の狀を此所へ認め置いたれば何うぞ貴僧之を持つて寶象國へ御出に相成りたい　三藏「それは何うも千万辱じけなくして手前一人で……　婦人「イエ〳〵、取押へたる沙悟淨と云ふ人は助け、且つ八戒と云ふ人諸共に待たして置き御身は魔王自身に縛つたる繩にして解かんとすると雖ども之を容易に解く能はず一應吾夫へ申入れて魔王の許可を受けてから繩を解いて御助け申さう、先づ紙を確かり持ち給へ　三藏「千万辱じけなしと云ふ時に縛られて居ります三藏の懷中へ彼の女は父の許へ送りまする書面を差入れましたる樣子、父の許へ送る書面と聞いたから三藏ソレを懷中致した、其中に彼の百花と申しまする

婦人は魔王の側へ參りました　黄袍「何にしに其處へ來たのだ百花「外ではございませんが吾夫へ對して一つの御願ひがございます　黄袍「何だ　百花「斯樣不束なる者を十三年以前より御手許へ御置き下し置かれまして御愛し下さること一通りならず、併し手前に一つの望みがございまして下さいませうか　黄袍「是はしたり、夫婦となりて二人の子供を擧げたる仲に何事に依らず汝の申すことを一として吾れ背いたることなしし何なりとも申せ　百花「叶へてやる　百花「叶へて下さるから今日御押へにありました彼の僧並びに弟子の一命を助けて下さることにはおりますまいか、と申すのは此二人の子供の身を大きく致すまでは必らず出家を助けんと天部の神且つ佛へ對し約束を致したることにございまする　黄袍「ハヽー二人の子供の成長を待つがために出家の命を助けると云ふことを天部の

神或は佛へ對して之を誓つたと云ふ……　百花「然るに今日押へられましたる唐僧此儘にして食物と爲る時には吾れ天部の神佛へ對して誓いを破るやうなるもの、おすれば子供等二人の成長も覺束ないことにございいまを、夫婦の中に擧けましたる二人の子供何うぞ身を大きくして遣はしたく存じますれば何卒彼の僧の一命及び弟子の一命を御助て下さいまをやう。と言いながら魔王の側へ參つてしなだれ掛つた、流石に惚込んだる所の女の言ふことでございまをから彼の魔王もデレッとして滅をダラ〳〵と流した助倍な魔王があるものだ　黄袍「他人の言ふことは必らず用ゐることはならん、併し汝天部の神へ誓いを立つて、さうして助けたいと云ふなら宜しい今日は助けてやるから勝手次第に繩を解いて何方へなりとも遣はしたら宜しからう　百花「アヽ妾の申す、ことを御聞屈け下し遣かれ辱じけなう存じます左様ならお言葉に從いまして……。と易々と許すと云ふことにかりましたソコで直に是から繩を解いて三藏を助けまする、三藏喜こんで此所を出る、門外に八戒沙悟淨の二人出て居た　悟淨「御師匠様御出なさいまし　三藏「如何致した　悟淨「何うにも斯うにも此様な不實な奴はございません、八戒と云ふ奴は私くしが取捕まつて仕舞うのを知つてながら小便所へ行つたつきり來ないので私くしも闇い所に投り込まれたから急々食はれることかと思つて居たんでさうすると女が來て助けて呉れたんだ　八戒「ヘエー女が來て助けたか俺も捉まれば宜かつた　悟淨「助倍な奴だ何て、へ面をして居るんだ　三藏「さう事が極まれば少しも早く退散しなければならん　悟淨「あの女が食物を呉れました決して怪しいものではございませんから召上がりました。と岡に進め悟淨八戒餘れるを食し、元との赤松林

べ参つて見ると馬も荷物も其儘にソックりしてありますから馬を引いて三藏を乘せ荷物を持つて二人は供に付いて漸やうのみとにいたして此の所ろを立ち出でました、三百里の里程を急いで参ぬりまして寶象國へ入り國王に面會をいたしまそる

一條

第四席

既に寶象國に入りました、然る所が城門に近づいて三藏自ら國王に拜顏を致したきことを門守へ對して申入れました門守早速に之を國王に對して取次ぎまそる其時に寶象國の國王唐朝より致して西天竺へ參る僧が面會をしたいと云ふは何か仔細があるに相違ないと思ふから茲に面會を許した、然る所が三藏懷中から取出したる彼の百花より致して送りました、書面云々の物語を細やかに致しまそると國王大いに驚ろいて其書面を

一通り見たがもう死したるものと心得て居た十三年も便りを致さゞる娘百花より致しての書翰にして今日碗子山の怪物の爲に右樣愚さまれ、小供まで生じたと云ふことを書いてあるから一つは怒り一つは慨き且つは三藏の手を取つたることにして　國王「貴僧來つて斯る書面を持參をして呉れざれば生涯吾が娘の生死をも知らんので臓に辱じけないことである、何うか長く此所に御足を留め疲勞を休めて其後西方へ赴いて下さるやうに。とありました町吶に扱ひまそる、三藏も大きに喜ぶび、八戒沙悟淨の二人も其々に此所へ待遇されました所が、國王一日酒宴を爲して居る時に何うも心勝れないと見えて頻りに嘆息を吐いて居ります、八戒沙悟淨の二人其所へ出て　両人「國王は大分御心配あさるやうに、心得まするが何で左樣御心配なさる國王「されば吾れ三人の娘あり第一第二の娘は既き婿を取り、第

三女は十三年以前に行衛知れぬ魔王の爲に是は食はれしものと思ひたるに幸ひにして德僧の吾へ書物を持參せられしを以て無事なることは承知致したれどもあらうことか魔王の爲に今日捕さまれ子供までも拵けて居ると云ふのは實に情無い吾れ力有らば碗子山へ到し兵を進め其魔王を退治致して娘を取返し手許へ之を案内をしたけれども何分にも今國は聊か富みては居るが兵は悉とく弱く如何共通力自在の魔王を退治致すと云ふことは出來ず近きに娘が居りながら之を手許へ呼ぶことがならぬかと思へば情無い譯である仙術を必得たる者でもあり其黄袍郎とか申せる怪物を退治致して無事に娘を取返して下されば莫大なる禮を致さうと思ふが差當つて誰を願はうと云ふ人もあい　八戒「ハアー左樣あら何でございますか其魔王を退治をして御娘子を連て參りますすれば莫大の褒美を

下さる……オイ悟淨何うだい行かうぢやないか　悟淨「又始めやがつた行たつて叶はないよ　八戒「叶はないつたつて此間は腹が空つてたから叶はあかつた、もう此位腹が出來て居るから一人ぢやア少し危ねへけれども二人で行つてやる分には何でもあい。沙悟淨もソレを聞いて　悟淨「成程貴樣が逃へしあければ宜い　八戒「エ、國王左樣あら吾々共兩人が其御願みを足しませう、其代り師は此所へ御置下さるやう　國王「ハ、ー御身等兩人にて其怪物を退治が出來まそか　八戒「實は此間一度やつたので其時は此方が腹が空てたので負ましたが、さもあければ先方遠ら強いからと言つて先方は一人此方は二人でございます　國王「併し是から御出になると言つた所が三百里からある里程……　八戒「三百里位の道は何でもございません、十分ばかりで行ます　國王「行まそか、歩いて……　八戒「歩いて行くの

ちやアございません、雲へ乘つて參りまを　國王「雲へ乘つて……」

他僧御手前の徒弟は雲へ乘の術を御存じか　三藏「されば、是は途中より致して我が門に加へたる者、此沙悟淨八戒共中々の奴當人の申する通り溺愛致して參つたらば黃袍郎と申そる者は必らず負やうとも思はれません　國王「イヤさう云ふことあらば一つ廻はう、併し吾々共の安心をするやうに二人で此場に術を一ッ見せ給へ　八戒「見せろと言つて外に見せるよとはあい、雲を呼んでソレへ乘て一つ行つて來ませう　國王「出來まそかつて八戒「出來ますとも其位のことは何でもあいので……御師匠樣行て來ませよ、貴僧は人を殺そうとを大層御嫌ひあるけれども是は人ちやアないので、怪物を殺すので娘を連て來て上げれば國王も何んなに喜びませう　三藏「必らず粗勿の無いやうに致せ、仕損じるな　八戒「ナニ此八戒が付て居るのでございま

そから大丈夫で　三藏「八戒が付て居るから危ない　八戒「左樣でございますとか、ソレあらば……」と二人ながら十分に食事を致し身輕に支度を致して瓦ひに熊手を提さへ何やら兩名呪文を唱へて居たが忽ちの間に彼の國王の在まそ高樓の前に黑雲舞下つた樣子アレッと思ふ中に兩名共に其雲に打乘り熊手を揩いてプウーッと風を切つて走りまする樣子でございますから國王はじめ一同驚ろいた、此擂梅ならばと思つて居る內に兩人の姿は忽ち見えなくなつた、兩人は雀躍りして彼の碗子山波月洞の門前へ來り　悟淨「宜いかい　八戒「宜し此間は腹が空てたから往かなかつたが今日は大丈夫だ　悟淨「斷つて置が逃るな　八戒「心得た、大丈夫だつてへことよ、逃やアしない兩人大きな石を取てドン〳〵と打付ましたことゆゑ石門は碎けた樣子、魔王共驚ろいて何事が出來致したるかと小怪物大數集

所へ出て様子を見ると此間助けてやつた奴が再び乗込んで來たから、ソレ此間の奴が來たと云つて面々獲物〳〵を取つて打つて掛る、悟淨八戒両人は先達とは違つて勇氣十倍して居る、態手に掛けて小怪物を七八人打殺した、其手練に驚ろいて餘れる者は奥に逃込んで此次第を黄袍郎に告げたから怪物に於ては大きに怒つて其藏から大いなる刀を提げて其所へ出て來た

黄袍「汝一度助け遣はしたるに又もや此所へ來つて吾が石門を壞すとは怪むべき奴なり、覺悟をしろと。両人を目掛けてブウーンと刀を廻して打つて掛る、両人心得て打合つて居たが何うして此怪物容易ならん者と見えて風を起し雨を降らせると云ふ術を心得て居るから俄かに靈動雷電をする位、打合つて居るから八戒考へて居たが能手を搦いて逃げて仕舞つた二人で さへ今のやうな海で餘程危ない所、ソレを八戒が逃げたから

沙悟淨迚も叶はないと思つたから逃げやうとする所を彼の怪物悟淨の襟髪を掴んで二ッばかり振廻した儘に寶塔の傍らへ來りて其所へ引据ゑ

黄袍「察する所汝此所へ來つて吾を殺し妻を奪つて寶象國へ去らんとするの心底であらう。と又もや沙悟淨を提げて奥へ來り妻の襟髪を押へて

黄袍「コレ甘言を以て吾を偽り察する云ふ妻の寶象國の父の本へ書面を送つたに相違あるまい、ソレ故に彼の寶象國へ罷越したる滑僧却つて此者等へ申付けて吾を殺して汝を助け寶象國へ案内をせんとして來つたるに相違ない、サア父の許へ書面を送つたか送らぬか尋常に申せ。百花と云ふ婦人は驚ろいたけれども此場に至り書面を送りましたと云へば殺されると思ふから

百花「是はしたり吾夫何を疑ひ給ふ吾少しも君を欺きたる覺無し、左樣あること夢にだに知り申さ

黄袍「何うだ汝は三魂とか云ふ奴背面を持つて寶象國へ走つたるに依り國王から頼まれて吾を殺しに來たのであろう。沙悟淨者へた、ソレで來たのだけれどもさうでございますと云へば女の命がおい、自分は捕まつて仕郷つて術は及ばないし、力は足りないし、何うせ殺されるのなら俺だけ命を捨てゝ此女を助けてやらうと云ふ了簡八戒よりは幾分か其邊の考へが早いと見えて　悟淨「大王吾れ愚に抑へられたるを道幅に思つて此所へ參つた決して背面おどを是なる婦人が逃つたる譯ではない又寶象國の國王より御身を討つことを吾々共へ依頼した譯ではない　黄袍「必らずさうか　悟淨「全たくさうだ　黄袍汝の一命はないがソレでもさうか　悟淨「一命のない二命だ、此間助けられたからアレより五日あり十日なり生延びたと思へばソレで宜い、速やかに此所に於て拙者の首を刎ね給へ　黄袍「イヤ汝一人の首を斬つて何とする食ふ時には三人共に食ひ馬も共に食ふ覺悟が。ど彼の怪物取出したる針金を以て忽まちの間沙悟淨をグル〳〵卷にしたが針金で縛られたから動くことが出來ない、小怪物に申付けて土の牢の中へ打込ました、沙悟淨可愛想に到頭土の牢へ打込られて仕舞つた怪物は百花を其所へ呼んで　黄袍「今彼の者の一首に付いて汝の明白なるあとを吾れ會得したる聊かたりとも其胸を痛めさせたのは誤りである是より吾れ寶象國に至つて國王の心底を尋ね且つ悔むべき奴は彼の出家一命を助け遣はしたるも思はず寶象國へ參つて何か言葉を以て國王を欺き二人の弟子を此所へ遣はしたに相違ない、其恨みを晴らして參るから汝必らず此所に居ろ。百花は猶ろいて　百花「何うぞ吾夫ソレばかりは……」と言ふたが即ち忽まちの間口に呪文を唱へまもると今まで荒々しき猫のやう

なる姿をして居たのが年齢三十七八面美玉の如くに致して若て居りまそるものも錦の衣を纏ひ何も立派な姿になりました百花に於ても大に悲ろいて　百花「貴所は其扮装で御出あさる黄袍「イヤ斯う姿を變じて參れば國王吾に面會をせんとは百は　百花「さう云ふあとから御留め申しは致しませんが寶象國へ御出にあつても必ず酒を召上るな酒を飲で寝ると必ず其本体を現はしまそ、本体を現はさば一同の者が驚ろきまするから……　黄袍「宜し〳〵、決て本体を現はす氣遣ひはない、又酒を飲氣遣ひもない參つて思ふ存分に彼の坊主を嬲らんければならん。と是亦た雲を起して忽ちの間寶象國へ至りました、門の此方へ參りまして城に物やさしく其聲に於ては金の鈴を振るやうある美聲でございます、門守に向つて　黄袍「聊か頼みたいことあつて越越した拙者は碗子山の獺に住居を致する者、國王に拝

顔を致して申上げたいとがおつて參つた、對面の相叶ふやうに致して貰ひたいと云ふのを見ると何うも人物と云ひ辯舌と云ひ変と云ひ一点の非の打所もございませんやうな好男子でございまそから右の次第を取次へ申入れ、掛の者から國王の耳へ入れた　國王「何者であるか面會をしやうと云ふので早速に是から案内をする、一段高い所に寶象國の國王椅子に凭つて居り、臣等一同東西に居流れて居ります、三歳も國王の前に扣えて居る、階段の下へ參りまして禮を施しまそる樣子を見た所が何うも立派な人物だ　國王「汝は如何なる人かるぞ求めに應じて面會を許したり、三拝を爲したる彼の者　黄袍「國王の麗はしきを拝し身に取つて尿どけあく拙者は今取次の者に申入れた通り碗子山波月洞の傍らに住居を爲し農を以て今日の營業と爲し居ります者、長き物語りなれども一應御聞取に與かりたい

拙者は麓家に育つと雖ども能く弓馬の道を學び、自分より申すも如何なれども弓を取ては先づ名譽なりと人に申されて居る唯今を去る十三年前弓矢を掻挾んで山から山を駈歩きましたる時に俄かに風立ちましたることゆゑ何事と心得樣子を見るに大いなる虎一人の少女の帶際を噛へて來つたる樣子、憐れ其體に捨置かば虎の食物にならんと心得、已れ手馴たる弓矢を取つて之に向い射掛けをしたる所、幸いにして口に噛へたる上紐の所を射切つたり、少女は其儘に倒れ虎は拙者の弓勢に驚ろいて其儘逃げる、近付いて樣子を見れば少女は氣絶おしたる有樣なれば介抱を爲したる所、漸く蘇生を致した　國王「フーム、それから如何致した　黃袍「其後段々樣子を相尋ねたる所即ち當國王の第三の姫君なりと云ふことを承たまはり送り歸さんとする と雖ども此儘差置て呉れと申を娘が怒み、ソレ故吾家に伴い大

切に養い候とあろ、少女とは言いながら最早年頃にて國王の御前申すも如何なれども吾れ兩親の許諾を受て其人と夫婦の語らいを爲し、十三年の間と云ふものは手許に在つて只の一度たりとも爭論を爲したるあるもなく、然るに今日樣子を承たまはれば其時に少女を害さんと爲したる虎、其姿を出家に變じ此度西天竺へ趣く德僧の姿に相成り此寶象國に入込みしと云ふことを承知致し即ち國王の御手許に之を侍らせる、其時には一大事なりと思いしゆゑ當國へ泥越して此事を密告致せ、當國へ來つて言葉を左右に寄せ欺むかんとする僧ありと雖ども必らず其言葉に乘り給ふな、是れ即ち虎の化物にして國王の一命を絶たんとする者なりと言葉巧みに申入れたので寶象國の國王は樣子を聞いて少しく驚ろいたる体でございます、其所に拙えて居たる三歳胸を痛めたる事にして、ツカ〳〵と進み寄り　三歳

アヽイヤ其人異なるふとを宣ふもの哉、吾れ唐朝より致して西天竺へ至らんとする僧依奘三藏と申す者あり、今此所に於て國王の御心を驚かしめ、吾れに難義を掛けんと爲し給ふか吾れ左樣なる虎の變化にあらず、此時に黄袍郎樣子を見るよりニッコリ笑つたるふとにて　黄袍「吾れ今申入れたる虎の變化たる者は即ち此僧なり、國王始め大勢の臣等には名僧智識と見え候ふは知らねども斯く申さる拙者の目より見る時は即ち虎の變化に相違なし恐るべきものあり、國王油斷し給ふな」と言つたる此時に三藏大いに怒つたるふとにして　三藏「汝如何なる人かは知らんが、吾れへ對して重ね〳〵の難義を掛けるもの哉、吾れ左樣なる僧少しもおし　黄袍「イヤ〳〵國王之を僧と見給ふことゆゑ僧と見える、能く目を着けてゐれある變化の姿を見給へ。と云ふ中に間もとより通力自在の怪物でございますから一碗の水

を汲んでふることにして其水を口中に含んでプッーッと三藏の身体へ吹掛ける、三藏人いに怒つたることにして　三藏「是はしたり、無禮ありと云ふ間に彼の者黒眼定身の法を行ひたるに忽ちの間に三藏の姿大いなる虎の如くに相成つた、國王を始めと致して樣子を見ると今まで法衣を着用おして滅に名僧德僧ありと思つたのがヤ何うも荒々しき虎の姿になりましたふとゆゑ一同後へ下がる中に心利いたる者は刀を取り或は弓矢を持つて向ふのもある、黄袍郎大音を揚げたることにして　黄袍「早く退治し給ひ、さなきに於ては國王の一命危うしと云ふ音聲を信じ弓矢或は刀を持つて打つて掛る三藏此所に於て落命をするかと思へば流石に天部の神々之を助け給ふものと見えて朝掛ける矢先は三藏の身体へは當らず刀を持つて來ると雖ども身体縮んで進む能はず、爲に猶躊躇を爲して見せたり此時に亟

り國王は寶劍を取り給ふねることにして　國王「吾を欺むかんと為したる變化正体を現はしたるからは助くべきものはないと自ら之に向はんとせば、黄袍郎三藏に難義を掛けまする御物語り如何相成りませうか、

第五席

悟空を手離してより三藏師弟は悉くの難義の地位に陥りましたも寶に氣の毒で斯る中に八戒は寶藏へ這入つて一寢入寢て淅う目が覺めて歸つて見ると驚ろいた、沙悟淨は碗子山の波月洞に縛られて牢の中に入れられ師匠は寶象國の牢に繋がれ寶に何うも哀れなる姿でございます、愚かな八戒も是には驚ろいた　八戒「サア大變だ俺が少し寝て居る間に飛んだことが出來て仕舞つた、何うも悟空が居ないくつちやア物が治まらない、斯うなつて見れは仕方がないから一つ阿兄の所へ行つて連

れて來て碗子山の怪物を退治て師匠樣を助けて貰はなければならない。と考へたものでございますから雲へ乘つて駆て知つて居りまする通り果山水簾洞へやつて來た雲から樣子を見ると數千の猿を集めて悟空は酒を飲んで居る樣子、後ろへ廻つて肩を叩く奴もあれば足を擦る奴がある、毛虫を取る奴がある、色々お奴が居りまを、頻りに飲んで居る樣子を見ると八戒の奴め涎をダラ〳〵と垂しやアがつて、美味さうに飲んでやがるお、此方は美味さうだけれども師匠樣も沙悟淨も邪に依ると食はれて仕舞うんだと考へて雲を降り悟空の所へ來た　八戒「何うも阿兄哲らく何時も御機嫌宜しう　悟空「此の馬鹿野郎　八戒「エヽ、悟空「エヽもねへもんだ此馬鹿野郎　八戒「阿兄は俺の顔を見ると突然馬鹿野郎〳〵と云ふが何も其樣に叩どなしに云ふあともねへぢやねへか、今度の僞と云ふものは大變おものだ　悟空「

何を働らいた　八戒「師匠様が彼樣に怒つてるのを漸う私が師匠様の袖へ縋つて謝つて孫悟空も西天竺まで御供をしたいと云ふ了簡一旦心得違ひを致しました所は勘弁してやつて下さいと俺が段々謝つた所が八戒がさう云ふなら勘弁してやらうと云ふのだ、だから阿兄迎ひに來たんだ阿兄是から行つて師匠に逢ふが宜い就いては手始めに少し阿兄も働かなければ往けおひと云ふと突然拳を固めてポカリ撲倒した　八戒「オヽ痛え〳〵、阿兄其樣に打たなくつたつて宜いぢやねへか　悟空「貴樣のやうに嘘を吐くデレ助は世の中にねへや、コレ貴樣達に欺むかれるやうなことで齊天大聖の官にまで進んで諸々の神達に近き佛にも近いて七十二般の變化の術が覺えられるか飛んでもねへふとを言やアがる汝のやうな者が付いてるから到頭寶象國の牢の中へ師匠様を入れたらう　八戒「ヘエー　悟空「兄弟の沙悟淨を縛らしたのは貴樣が中途で逃げて碌で寐て居たからだ　八戒「是は嬉ろいた何うも……　悟空「俺を探して連れて行つて師匠様を助けさせやうと云ふ了簡だらう同じとなら扨何うも阿兄飛んだことをした滅に濟まおかつた御勘辨に與りたい、實は斯う〳〵だと委細の話を言つて來るかと思やア俺を欺しに來やがつて……　サツサと歸れ　八戒「何うも阿兄は嬉ろいたな居おがらにして何でも知つてるんだぢやアま本當のおとを云ふけれども俺が大變にやり損なつたんで何うか阿兄行つて師匠様を助けて上げて呉れ又沙悟淨も助けて是から西天竺まで何うか阿兄が行つて呉れおければ俺達ばかりでは迎も行けねへ何うかさうして貰ひたい、……美味さうおものがあるお、ビフテキかい、一つ食はして呉んねへ　悟空「もう始めやがつた此野郎　八戒「何だソレは、ヒチウにオムレツ……

悟空「手前のやうに喰意地の張つた奴はねへ。叱言を言はれなから喰つてる　悟空「貴様達が殺されやうが何をしやうが其様なことは拙はねへが南海の観音様に言付かつて師匠様の供をして西天竺の大雷音寺へ行け往きますと約束をして俺も何うかして如来の御側へ参つて罪を許して貰つて再び天部へ昇つて斎天大聖の官に奉職する積りだ、俺が一緒に行つてやらア其代り八戒断はつて置くぞ是から先き何か手前に不都合があると師匠様が許しても俺が許さねへから何うだ貴様の下つてる北耳を切つちまうぞ　八戒「耳を切つちやア往けねへぢやねへか悟空「ダテシのねへ北唇を突剌くぞ　八戒「冗談言つちやア往けねい是から心を改めて決して嘘を吐かないから……。と云ふので、ソコで悟空に於ては大勢居る番族を其處に置いて　悟空「此通りの次第だから俺は時々歸つて来るけれども皆お留守を

して居て呉れ。之を聞いて大勢の小猿は又大王が行きあさるか大王が行くと此水簾洞が衰微すると思つたけれども仕方がない悟空忽ちの間に直綴を着用を致しまし、る十分に支度を遂げ雲を呼んで之に乗りまするし八戒と二人で再び碗子山へ罷越した、茲に碗子山へ参りまして働きまをお話も澤山ございます が別段に辨じまをる所もございませんから大略をして申上げまを、悟空のことでございませんから黄袍郎と暫らくの間闘ひしる所黄袍郎叫はす心得たから是は逃去りました、けれども此黄袍郎と云ふものは後に天部の神の扱ひで天部に暫らくの間留まりまをるやうなみと、第一に寶象國の牢内に居りまをる師匠を出して見ると其妻虎の如くでございまを、けれども悟空のことでありまをから、茲に清水を汲んで来て呪文を唱へ之を師匠の頭に掛けると忽ちの間元の如く三歳の妻になりま

たから寶象國の國王始め一同の者大いに奇異の思ひを爲し、宮に齋天大聖の神通力の宏大なるのに驚きました、尙ほ碗子山にありましたる黃袍郎の爲に暫らくの間夫婦の語らひを爲して居たが寶象國の國王の娘百花と云ふに二人の子供がある此二人の子供は固より變化の胤でございまして、是は悟空忍まちの間殺して百花と云ふのを寶象國へ伴ひまして國王両親へ相渡したふとゆゑ其喜ぶひ何に例へん方もございません位、從つて沙悟淨に於ても碗子山波月洞の牢内より之を助ける何うも沙悟淨の喜こびは別段此時に三藏は孫悟空の手を取つて押戴き三藏「悟空一度八戒の一言を余が信じて其方に暇を取らしたるに又今日其方來つて吾を助けると云ふは寶に辱じけない幸ひにして西天竺に至り如來の御手許に至つて其罪の滅すると同時に此度の恩義は必らず報ゆべし。とある孫悟空は手を突いて

悟空「師の御怒りに觸れたるも全たく此愚かなる八戒の爲したる業と云ふことが知れ、唯今の御一言を下し賜かれ悟空身に取りまして如何ばかりか有難いふとに存じます、此上共に西天竺までは必らず御供を致しまするふとゆゑ師も御心丈夫に御持ち下さるやう。依奘三藏に於ては涙を流して悟空の通力自在なること殊に志ざしの厚きふとを悲とく御喜こび遊ばし、尙ほ八戒を誡しめ沙悟淨に於ても一度危うき地に臨みましたのを悲とく賞めなど致します、寶象國の國王に於ても名々を留めて茲に三日の間饗應を致ました、ソレより樣々の物を送りましたけれとも三藏師弟頓と其送り物などを納めると云ふやうことはございません、一切之を謝絶致しました、ソコで寶象國に出でるやうになると前々の通り孫悟空馬の側に付き、三藏に於ては龍馬に打跨りましたるふとで、夢悟淨八戒御供を致して西を

指して急いで參りました、扨里程二百里餘と云ふもの別段に申上げることもございません、そると一ッの高山へ掛つた見た所が別段に家も無し賊に何うも山から山と連なつて居ります所唯々乏しいのは食物でございます、ソレは二日分三日分は持つて歩くと云ふこともあるが多くは食に乏しいことでございますから之には大きに難儀をして居る　悟空「御師匠様少し御待ちなさい何うも此山は變な山で怪物でも住んで居さうに思います無闇に參つてさうでもない怪物の窟へでも這入り、私くし共は何でございますが御師匠様の御身の上に間違がありませんから暫時御休息をなさいまし、八戒貴様は一つ行つて山を見て來い、尙は食物があるか、ソレとも怪しい物でも居るか見て來るが宜い　八戒「俺が行くのかい稀には沙悟淨をやつたつて宜いぢやないか　悟空「又始めやがつた、沙悟淨は沙悟淨の用がある、悟淨をやる時は俺の方でやる行かねへか　八戒「行くよ、何だい　悟空「何を口小言を言つてるんだ早く行かねへか八戒「今行くよ　三藏「八戒早く參つて樣子を見て參れ　八戒「エヽ宜しうございまして今行つて參りまして。三藏始め大きな石の所へ御休みなさつた、龍馬は近傍の立木に繋いで置きました熊手を揃いで八戒ノコ〳〵出掛けた、之を見て居た悟空、野郎又何かしやがるあと思つたから自分の毛を拔いて悟空の姿を拵らへて其所へ置いて小さな虫になつて八戒の擔いて居る熊手へ留つて喰付いて行つた偖八戒何にも知らない振歸つて見ると向ふに悟空も居れば沙悟淨も居る、三藏も居るから　八戒「エヽコ俺ばかり使ひやがらア、だが本當にあの悟空と云ふ野郎は氣に入らねへのだ氣に入らねへけれども彼奴が居あくあると厄介なことが出來て仕舞う、沙悟淨をやつたつて自分が行つたつ

て宜いんだ、ソレを動ともすると八戒々々つて俺ばかり使ひがる此山を見て來よと云ふのだが山を見たつて何うあるものかアヽー眠い〳〵少し寐て行つてやらう、一寐入やつてさうして行つて來ました何にも居りませんと言へば、ソレで宜いんだ、又何うもあの猿め怪物振りやアがつて癪に障る奴だ御師匠様は宜い氣にあつて何ぞと云ふと悟空々々を悟空と持切つてる、俺だつて是でも手下の三百人や五百人はあつたのだけれども觀音様に言付かつて仕方がねへから西天竺まで行くのだ、止さうと思ふけれども止すことが出來ねへので始末に往かねへと熊手を其所へ投出して慨いて草原へゴロリと横になつてグーグー眠り始めた悟空見て居たが野郎寢やがつたなと忽ち其の間に蜂になりまして寐て居る八戒の唇の厚い所をアツーり針で刺した、八戒飛起きやがつて　八戒「アヽ痛え〳〵。見るとアツー

ンと蜂が飛んでる　八戒「此んな畜生痛いや、ワイ何うもソレでなくつたつて眼れてる唇ぢやアねへか、ソイツを刺しやアがつてアヽー痛え、オー痛え起きて行くかと思ふと又ゴロリ横になつて唇を刺されると往けあいと思つたが法衣の袖を面へ掛けて又グーグー〳〵寐た、悟空愈々怒つて今度は耳の朶の毛をアツーり　八戒「アヽ痛え、……痛えあ何うも、此樣に蜂の居る山はねへや蜂山だ……行かう〳〵是は危ねへ。ソレから當人心付いて三里ばかりの道を行つたが　八戒「何うも往けねへ何にもなりやアしない、併し今歸つて行くとあの悟空の奴か何か言ふ餘り早く歸つて來たから怪しい廻つて來ねへのだなんだと言ふから此處で休んで往かう、休んで行つてさうして師匠様が行つて來たかと言つた時に行つて來たやうに話をしあければ往けない何と言つたもんだらう餘らを見ると大きな石があつて其大石

の前の所へ行つて八戒座つて仕舞つた　八戒「俺は白痴だから稽古をして往かなければならない、遅延ならと毆打倒されるから……此大きな石が御師匠様として……。」と手を突いて石へ御辞儀をして居る　八戒「エ、御師匠様行つて参りました。」と御辞儀をして居たが今度は石の上へ乗りやアがつて、八戒が行つて来たか。又飛下りてございます。又飛上つてございます。　八戒「エ、何にもございません　八戒「此山は何と云ふなと斯う聞かれた時に揺つたお此山は何と云ふ山だか知らねへ、……さう〳〵何でも搏やアしねへ、山の名を命けてやらう、……エ、御師匠様此山は轉挺山と申します」「怪物が居たか」　八戒「其様あるものは決して居りません、ハ、ー是で宜い〳〵、熊手へ止つて聞いて居た悟空がク〳〵笑ひ出した此野郎大きな石を對手に話しをして居やが

る忽ち熊手を搗いて歸り足にかつた様子だから悟空は先に小さお虫におつて歸つて来た師匠様と沙悟淨の待つてる所へ来て自分の体にして置いて毛を藏めて仕舞つた　悟空「御師匠様行つて参りました　三藏「ハ、ー貴様が参つて何した　悟空「何うも怪しからん奴でございます八戒と云ふ奴は、斯様々々斯う〳〵致しました、一人で御師匠様の假聲を遣つて居りました今歸つて来たら私くしが一つ嚇かしてやりましたから、彼奴は馬鹿ですから毆打るより仕方がございません。話をして居る所へ歸つて来た　八戒「ヘエー唯今歸りました。悟空其所へ出て来て悟空「ア、八戒大きに御苦勞だつた、何うした山を不殘廻つたが八戒「ア、不殘廻つて来た　悟空「不殘廻つたと云ふが此山は何と云ふ山だ　八戒「ウーム此山はアノ何と云ふのだ……　悟空「此山は何か轉挺山か　八戒「轉挺山……ヘエー岡兄知つてるの

か　悟空「此野郎……。ぶかーリ又一つ殴打られた　八戒「ア痛え

〜　悟空「何だつて汝はあの大きな石の前で御辞儀をしやがつたり石へ上つて師匠様の眞似をして居た名を命けるに事を替へて轉倒山とは何だ　八戒「へエー阿兄知つてるのか　悟空「貴様は草原へ二度寐たらう初めて寐た時に貴様の唇を突刺いた蜂があるだらう　八戒「ウムまだ痛えや　悟空「二度目に耳の脇を突刺かれたらう　八戒「さうだ能く知つてるな　悟空「あの蜂にかつて行つたのは俺だ　八戒「あの蜂は阿兄だ酷いよとをするぢやねへか　悟空「貴様が何をそるか知れないから後から行つたんだ本當に見て來い　八戒「又行くのかい　悟空「本當に見て來い沙悟淨をやるのは知つてるが悟空は悟空の用がある今度思圖々々して居ると蜂ぢやアねへ、洋刀になつて貴様の腹へ飛込むと　八戒「冗談百つちやァ往けおいぢやァ行つて來る

よ。再び熊手を携いて野郎ノン〜　出て行きやがつたサア今度は八戒怒りて居るから　八戒「何うもあの悟空と云ふ奴は何處まで通力がある為知れおい付いて來やがつて俺の唇を突刺いたり何かする。ブウーンと蜂が飛んで來ると　八戒「アヽー來やがつた〜　行くッてへことよ、大丈夫だよ、……俺が返事をしたもんだから向ふへ行つて仕舞つた。草原に虫などが居ると　八戒「彼處に居やがる危ねへ〜。斯うなると尋常の蜂や虫を見ると孫悟空に見にると見えて八戒の奴めノン〜　行つて段々山深く這入つて參りました、然る所此山は平頂山と申して此平頂山に蓮花洞と云ふ所があつて此處の第一の大王を金角大王、第二は銀角大王、豫て三藏主從此所へ通り掛ると云ふは彼の魔王両人が心得て居る手下の者に於ては彼是れ三百人もある、唐僧此所へ通り掛つた其時には引捕へて殘ら喰して呉れやう

と必得て居りまを、金角は弟の銀角大王に向つて　金角「汝唯今より山歩きをして、もう程あく三藏まを從此所へ來あに相違ないなれと三藏と云ふは固より徳僧にして是は術を必得て居るものではない、供をして居る者に八戒沙悟淨と云ふ者がある是も可成神通を得て居ると雖ども汝に較べて見れば取るに足らぬ者只一人孫悟空と云ふ奴がある彼は齊天大聖の官に進み一度天上を騒がした奴て、神通力ある者と云ふこと、必らず油断致をあ　銀角「委細承知致しました、今日來るか明日來るか、もう三日の間には來るだらうと存じて居りました所でございまを、宜しうおざいまを手前が參りて一々取押へて大王に献んじまする金角「彼等を食そるに於ては必らずや數千年の齢を保つ早速に參つて様子を見るやうに。とあつたるから銀角大王必得て大いある劍を横たへ、身の丈は彼是れ一丈二三尺もありませうか、小

怪物を三十八ばかり從がへ、唯今此平頂山南の麓の所へ參りますと向ふから熊手を揃いで耳の長い唇の厚い奴がやつて來たを見るより大音を揚げたることにして　銀角「ヤイ汝は依柴三藏の供をして歩く猪悟能八戒と云ふ奴か　八戒「出たぞ野郎銀角「吾は銀角大王と云ふ者なり汝の來ることを相待つたり、其方此所へ來るからは依柴三藏も來たに相違あるまい、サア悟をしろ。と突然腰ある劍を引抜いて打つて掛つたる様子固より致して八戒も腕前のある男でございまをから　八戒「何を言ふ此怪物と慇手を取つて暫らくの間打合つて居たがフウーッと俄かに風を起しましたる様子にもう是までと思いましたから雲の上に飛上がつたることにして一旦避けんとすると雖ども如何でか之を許すべきか、銀角飛込み來つて忽まちの間八戒の首筋を掴んで引立つた様子、八戒之を振解かうとしたが往けな

い、引提げたありに道化洞と申しまする窟の所へ來てドッかり其所へ引下した　金角「何うした銀角　銀角「阿兄此通りだ今山歩きをした所が此奴を一人生捕た、八戒と云ふ奴だらう　金角「待て〳〵　俺が見てやらう。と金角大王傍へにあつたる給麥を取出して八戒と見較べて居たが　金角「ア、此奴が八戒だ　銀角「阿兄直ぐに食うかい。八戒之を聞いて驚ろいた、食はれて堪るものか　金角「イヤ其儘縛つて池へ投り込んで置け、スッカリ奴が水腫れにあつた所で明日の朝食はう　八戒「ウッワ、水の中へ浸けて置かれて堪るものか　まちの間繩を以てグル〳〵卷にして裏の池の中へポカーリ投り込んだ、八戒驚いたけれども仕方がない　金角「銀角汝至つてあと〳〵の者を……　銀角「委細心得た八戒此所へ來たる所を見れば必らず三藏始め一同來て居るに相違ないから……。と三十人ばかりの小怪物を連れまとと

再び乘込んで行つた、御話別れて三藏始め待つて居たんだが八戒が歸つて來ないから悟空は腹を立つて　悟空「野郎又寐て居やがる俺が付いて行かあいものだから宜い氣にあつてる……悟淨貴樣は御師匠樣の側を離れあいやうにして居ろ、俺が行つて見て來るから　悟淨「阿兄俺が行かうか　悟空「貴樣は此處に居ろ、……師匠樣何處へも行つちやア往けません此山には餘程怪物が居るやうに思ひまするから、事に依つたら八戒怪物に捕まつたかも知れません悪つて樣子を見て參りますから……。と其儘に致して孫悟空此所を出る其跡へ銀角大王乘込んで來て一旦は沙悟淨と打合ひましたが中々及ばあい、沙悟淨も三藏も龍馬を引掴んで窟へ戻つて之を金角大王に渡した、金角大王に喜こび名々を綱して傍らの立木〳〵釣して仕舞つた、悟空一人見ないから銀角大王三度山へ來つた、悟空は山を歩いたる所が八

戒は居ぬ何うも様子が分らぬから一旦立戻つて見れば師匠も沙悟淨も馬も見えませんから、慌々敷ろいて諸方捜しました所銀角大王に出會ひました茲に銀角大王を對手に孫悟空術を敵べまする一條に相成ります件は次席に……

第六席

齊天大聖孫悟空は名々の居ざるが故に狂氣の如くにあり、扨は此山に住む變化師を始め我か弟々子を拐攫つたに相違ないと必得、耳の中より取出したる如意棒を捻つて既に巻を傳ふて行かんと爲したる所一陣の風起ると共に現はれ出でたる銀角大王「銀角」其所に却ぬたるは孫悟空と云ふ奴か最前より汝の行術を尋ねたり、イザ此銀角の劍の下に汝の一命を絶ち呉れん。と する、悟空カラ〳〵と嘲笑つたるあとに致して　悟空「如何に銀角大王と云ふ奴は汝なるか、サア悟空の用いる所の如意棒を受

けられるなら受けて見よ。と其所へ飛出で暫らくの間千變万化三十餘合打合はせて居たるが銀角は叶いませんから次第に打据られて後へ〳〵と退る様子、悟空に於ては焦つて打込んで参ります其棒を掻潜つたるあとにして銀角口に呪文を唱へまする此銀角と云ふ奴は山を遣います、酷い奴があるもので今打合つて居る所へブウーンと物の響きが致しますると這は抑も如何に空中より致して須彌山が其所へ落ちて來て悟空の腦天を砕かんと爲したる有様、悟空カラ〳〵と打笑つて　悟空「此奴山を遣ふ山師だな。空中より落ちて來りました其須彌山を左の肩でウンと受けた、銀角此様子を見るより少しく慌ろき再び呪文を唱へると此度は大いなる響きと共に峨眉山が落ちて來つたることにして又もや悟空の腦上を砕かんとあしたり、悟空心得て右の肩で峨眉山を押へた銀角三度の術を遣いたる時に空

中より致して泰山の落ち掛つたることにして悟空の頭上へ當つた、幾ら神變不思儀の孫悟空なりとは雖ども三山三神の法を遂はれては堪りません、忽ちの間其三つの大山の下に悟空挾まれた起上らんとそるとは雖ども頭上には泰山あり、左右には須彌山あり峨眉山あり中々以て動くことは能はず北山の下になりまして何うそることも出來ない、此時に孫悟空大音を揚げたるあとにして　悟空「天部の神はあらざるか如何あればこそ斯る難儀を掛ける者に掛けるぞ掛る者は唐朝より帝の勅命を受け依奘三藏と云ふ德僧西天竺へ至らんとする者の供あり、掛る者も一人の山家なり、然るに山神何故あつて怪物の爲に力を添へて吾れに斯ばかりの憂目を見することか又上天の神々は居眠でもして居るか孫悟空一人の大事にあらず、依奘三藏法師の一大事なり天部の神は寐てでも居るか。孫悟空山の下にありて大聲を發した

のが三十三天に通じた、此野郎の聲は大きいや、三十三天まで通じる孫悟空だから仕合せでございます、燕林だと席へ御客一人も來ない家に寐て居て聞いてるさうでございませう、席へ坐料を持つて來るより其樣な大きな聲から寐て聞いて居られる、悟空を其儘に此山へ伏せて置いて銀角大王は取急いで歸つて來た　金角「何うした銀角　銀角「何うも阿兄其悟空と云ふ奴に出會つた　金角「出會つたかい　銀角「出會つた、何うも剛らい奴だ　金角「さうだらう大抵な奴は叶はねへ、何うした　銀角「暫らく打合つて居たが迚も打合の業には叶はねへから例の通り山を斬つた　金角「ウム貴樣に山を起されゝば此上はねへ、身体碎けて仕舞つたか　銀角「ソレが第一に奴の頭上から須彌山を叩き付けた所が左の肩で受けやかつた、二度目に峨眉山を斬り下したから右の肩で受けやかつたけれども三度目に泰山を斬り下し

たものだから挟まつて仕舞つた　金角「さうか、命は死ぬまいがアヽやつて打捨つて置けば死ぬに相違ない、少しも早く逃れて來たら宜からう　銀角「けれども阿兄何だよあんな奴だから此方で山を取除けて出さうと思ふと又暴れるに相違ない　金角「さうも然らば別段に山を取除けるにも及ばない、吾が家の寶物を以つて吸ひ取つたら宜からう　銀角「ぢやアさう云ふことにしやう。此金角の手許に數々の寶物がある其中に一つの瓶、一つの葫蘆があります、是は何方も人を吸込むの道具で、默つて吸込むものぢやアない、空の方へ底を向けて置いて孫悟空と呼ぶ、先方で返事をされば此葫蘆の中へ這入つて仕舞う、是は何うも無二の寶物でございます、之を取出した　金角「誰か心利いた者に持たしてやり、吸込んで來れば宜い、蓋をして目張をして置いて彼の身体が溶けて仕舞ふまで置く、さうして背める時には不老不死だ　銀角「誰をやらう。とあつた時に傍らに扣えた精細鬼伶俐虫と云ふ二人が出て來て　二人「何うか私くし共をおやりあすつて、下さい　金角「貴樣達は途中で間違のないやうにしろ二人「大丈夫でございます　金角「落とな、此瓶を落とと今川橋などへ行つて買はうとしたつてありやアしない、此瓢箪も惡魔をして底あゝを抜くな　二人「大丈夫でございます　金角「名を呼べば返事をする返事をすれば這入る　二人「委細承知いたしました。と精細鬼伶俐虫の二人はソレを持つて孫悟空を吸込みに出掛けた、悟空の方は　悟空「ヤア天部の神は居らざるか、孫悟空の大事なり、依奘三藏の一命に係はる大事、天部の神はあらざるか。と言つて大きな聲をして居た、此時に其聲三十三天に通じたものでございますから神達は集まつたることにして　天王

下界に於てあの通り、鬐を揚げて居るのは孫悟空に相違ない、彼は西天竺へ參る依奘三藏の聖ち守護をして行く者、其保護をする悟空が大鬐を揚げて助けを呼ぶのは何か事有るに相違ない と早速に護法揭諦を其所へ招いで　天神「汝下界に降つて樣子を改めるる樣致せ、察するに山の下になつて悟空苦しんで居るやうに思ふ　揭諦「畏こまりまして御座る。と護法揭諦は急ぎ雲に乘りまして下界に降つた、先づ山神を其所へ呼んだ、護法揭諦のことでございまをから山神直ぐに出て參りまして　山神「エヽ何の御用で　揭諦「何の用ぢやない、此須彌山、峨眉山、泰山おとは貴樣達の預かる所だらう　山神「左樣でございます、手前共預かつて居ります　揭諦「何で怪物に貸した、此下に孫悟空が挾まれて居て大いに難儀をして居るぢやあいか　山神「ヘエーさうでございまをかじやあない、何だつて

貴山ヶ無間に怪物に貸をんだい　山神「無間に貸す譯ぢやアでございませんけれども諸式が高直になりまして　揭諦「ナニ……山神「其諸式が高直にありまして當り前の月給はかりぢやア思ふやうに旨い酒も飲めません、據ころなくソレが時々何でございまを、平頂山の蓮花洞に居りまを金角銀角と云ふ二人から色々なものを送るものでございます　揭諦「仕方がなしに貸したつて外の所へ遣う譯でございますが　山神「ヘエ　揭諦「ソレが天大聖を挾んだのだ、早速取退けて能のものでおい、取分けて齊天大聖を挾んだのだ、早速取退けて能く詫るが宜い、悟空怒つて貴樣達を撲殺して仕舞うかも知れない　山神「滅に恐れ入りまして御座います。揭諦は其儘にして天上へ歸る山神は早速是から三つの山を取除けた、下にあつて居た悟空突然持つて居たる金箍棒で山神の頭を二つばかり擲つた、山の神は慌ろいた　悟空「此箍棒め何てへことをするのだ、今

聞いて居れば金角と銀角から幾らか賄賂を貰つて山を貸しやアがつたんだらう、無闇に山あんぞは貸そもんぢやアねへや

山神「何うか大聖御腹も立つだらうけれども御勘弁に與かりたい今何うも護法揭諦に何んかに叱られたか知れない　悟空「貴様達が貰くねへのだ手前達は助けて置奴ぢやアないけれども今日は格別で助けてやらア、何うも三つの山を重ねやがつて重くつて〳〵仕方がありやアしねい、是から幾ら銀角と云ふ奴が法を以つて祈つても山を貸しちやア往けねへだ　山神「もう山は貸さない、懲々した、……アヽ痛え人の頭を殴打つて　悟空「當り前だ。スルと向ふへプウーッと光り物がした、悟空「を見て居たるが　悟空「ヤイ山神何だ向ふに大層光り物がするのは……山神「大方是は何でございませう、其大王の手許に色々お寶物がございませけれども取分けて一つの瓶一つの葫蘆がおります

悟空「フーン　山神「ソレはんを盛込んで仕舞う葫蘆でございまそ。ソレで大方貴所を此山の下へ入れて置いて何時まで置いても仕方がないから盛込まうと云ふ心算で來たのでございませう、是は私くしが御詫なから貴所へ御注意しまそが返事をしちやア往けません、先方で驚天大聖孫悟空と呼びまさア、其時お前さんが返事をすると飛込んで仕舞う　悟空「危ねへ〳〵、飛込むと何うする　山神「其上へ蓋をして仕舞うと何うしたつて出ることが出來ない、其中に身体が溶解て仕舞うので　悟空「危險なものを持つて居やがらア、其瓶と瓢を持つて來るからソレで光るのかい　山神「瓶と瓢は寶物でございまそから光ります　悟空「さうかさう分つてりやア、宜ろしい貴様は此の山の神だな　山神「左様でございます　悟空「貴様に聞いたら大抵知れるだらうが何か好む物がありやアしねへか　山神「左様でございまそ

好むものと云ふのは外でとがいません、仙術を好んで何うか仙丹を飲みたいと常に申して居ります　悟空「ハヽー仙術を好んで仙丹を飲みたいと云ふのは不老不死と云つて生涯死なゝいやうにをる怪物の癖に長生をしたがる、貴様はもう歸つても宜いが此先決して山おんそを貸しちやア往けねへよ　山神「何う致しまして、以來山は貸しませんから何うぞ御勘弁あそつて……オッ痛い、頭が腹れた　悟空「其様な頭は搗うものか山神は退散をする悟空は忽ちの間呪文も唱へると年齢三百七八十になつて白い髯を生して曲つた杖を突き毛を抜いて一つの葫蘆を拵らへて此瓢箪を腰に着けて山道をノソ〳〵歩いてる所へ二人の怪物一人は瓶を持ち一人は瓢箪を持つて來た、出會しなに之を見て　精細「オイ〳〵老人何處から來たへ此處は人の澤りに來る所ぢやアねへが何だつて道入つて來た。悟空四邊を

見て居たが　悟空「ア、貴様達は何だ　精細「俺達は此山に住んでるものだ　悟空「ア、さうか、此山に金角銀角と云ふ者が居るか　精細「ソレは俺達の頭だ、何處から來たんだ　悟空「何處から來たと言つて私は蓬萊山の仙人だ　精細「ヘエー蓬萊山の仙人さうかい……オイ〳〵蓬萊山の仙人だとよ　伶俐「何うもさうらしい様子を見た所が何うも仙人に相違ない　精細「オヽ老仙には何と仰者るお名前で……悟空「だつて名前まで急に拵らへるまとは出來ないから困つて居たが　悟空「何か私の名前は空々仙人と云ふのだ　精細「空々仙人……聞いたかい空々仙人と云ふのを……　伶俐「聞かないな　悟空「デ其金角銀角の二人が秘藏にする葫蘆があると云ふとだ人を盛込む葫蘆で鍼にハヤ抽いもの、名を言はあければ其中へ這入らぬ、さう云ふやうな瓢箪を今日の寶物として居ては迚も往かんから、私は両人へ勧

して良い物をやらうと必得て終つた、其人を盛込む瀉蓋並びに瓶と取換へてやらうと思ふ　精細「へエー何でございますお前さんの持つてるのは……　悟空「是は世界を盛込んで仕舞う瀉蓋だ　精細「世界を盛込む、へエー何でございますか天地陰陽皆お盛込むので……　悟空「何でも盛込んで仕舞う　精細「マア〳〵嘘を吐いちやア往けません　悟空「嘘ではない、全たくだ、汝等偽りと思ふなよ此所に於て一つ世界を盛込んで見せやう　精細「へエー何でげすか直ぐに分まそか　悟空「直ぐに分る、能く眼を開いて見て居ろ、今立所に世界を盛込んで汝等を驚ろかしてやるから何う云ふ塩梅だかと様子を見て居る其中に悟空腰の瀉蓋を取出して口の中で漫圓〳〵々々言つてる中に固より神通力を得て居りまする齊天大聖孫悟空見る〳〵間にゴオーと云ふ音がすると全然眞闇になつた、ヤ何うも伶俐虫も精細鬼も青くなつて慄ろいた　二人「老仙是は何でございまそ　悟空「もう盛込んだのである世界が此瓶蓋の中に這入れば斯の通り闇くなる、無闇に足を出すと往かんぞ大海へ落ちる　二人「大變ふみどが出来て仕舞つた　悟空「ソレ又天上世界を見せて遣はゝ、斯うなれば天上世界が見にる。と又もや呪文を唱へると忽ちの間光輝を放ち潑々たる様子、見れば這は抑も如何に金殿玉樓璃を列べてありまそ北の様子に愈々慄ろいて　二人「へエー是は何で……　悟空「天上界だ是から地獄極樂だ　二人「左様でございまそかと様子を見て居る中に呪文を唱へると見る〳〵間に閻羅大王おどが出て来る、様々の者が居るから二人は大いに慄ろへて　二人「成程是は天地陰陽世界を盛込んで仕舞つた。呪文を唱へて前々の通りにして　悟空「何うだ　二人「何うも慄ろきましたな、先づ此位の寶物は世界に一つでございます　悟空「此品

と貴様達の持つてる二つの品と取換へてやらうと思ふが取換へるか　精細取換へるどころではございません、斯う云ふ物を持つて歸れば頭が喜ぶびますからさう云ふ事になすつて……

撒はおいな伶俐虫　伶俐宣いとも却つて褒められちア、孫悟空を一人盛込むんで北様お小さな寶物ぢやおい、陳義な瓢箪だ何うか仙人御取換を願いまそ　悟空「さう云ふあとから此方へ渡せ、此瓢箪を渡してやるから　二人「大きに有難うございます

と精細鬼も伶俐虫も持つて居たる右の寶物を孫悟空に渡すと悟空之を納めて大きな瓢箪を持たしてやつた　悟空「之を持つてけ。今までは自分の身の毛を以つて造つて居りましたが瓢箪、渡す時には身の毛だつて一本でもやつちやア詰らおいと思つて側にありました馬の沓、之を瓢箪のやうにして渡してやつた二人はソレを押戴いて居る　悟空「ぢやア私も別段に遊花洞へは行かないけれども金角銀角に宜しく申せよと北儘にして悟空は二品の寶物を戴めると雲へ乘つて何處かへ行つて仕舞つた二人の奴は喜ぶんで之を持つて立歸り金角に見せると金角怒つたの怒らないの二品の寶物を取られて馬の沓を持つて來た是は全たく孫悟空の爲したるあとに相違ないとありまして尋ねたる所が三つの山に於ては元の如く中天に戻つたりと云ふことがわるから、して見ると彼の天部の神を祈つて山を戻したに相違ない、此上は如何致したものであらうと思つたが尋常では孫悟空を押へることが出來ません、幸いにして金角の手許にありまを三つの寶物を出して是から金角大王孫悟空と茲に北術を較べまする一件に相成ります

第七席

固より孫悟空は小怪物二人を歸す時に自分は駒虫になつて小

怪物の屑へ割つて蓮花洞の窟へ來た、何を言ふかと思つて聞いて居るとも知らず、右の次第を語ると金角大いに怒つたること にして此上からは、悟空を押へるには吾家の三ッの寶物より外には あいとなつた、此三ッの寶物と云ふのは七星劍、芭蕉扇、幌金繩と申しまする、此幌金繩と云ふのは金角の手許にでおいません、是は繩でございます、不思議な繩があるもので、呪文を唱へて投げる時には其繩が自然に人を縛し、此幌金繩に縛されると何うしても拔けることが出來ない、當時金角の阿母が壓龍山壓龍洞と云ふ所に居りまして其處へ預けて置た、金角熟々考へたが先づ悟空の如き神靈不思議な奴だから同じまとおら寶物を揃へて置いて搦め取りたいと思ひましたから直ぐに巴山虎倚海龍と云ふ二人の手下を招いて　金角「其方共兩人は壓龍洞へ參つて阿母に、さう言つて呉れ、今度唐朝より西天竺へ行く坊主を

始め一同を捕まへて其肉を進上たい、就いて悟空と云ふ奴がある、此猿か容易あらん奴、何分にも押へるまとが出來ないから、幌金繩を持つて御出下さい、折う言つて來い　二人「宜しうございます　金角「二人で御供をして來い、大方阿母さんも喜ぶんで唐僧を食うであらう、ソレに又悟空と云ふ奴を生捕つたら彼奴は付燒か宜い。悟空は之を聞いて、筀棒めエ付燒にされて堪るものぢやあい　金角「油斷をするな幌金繩が手許へ來れば直ぐに悟空を生捕る方へ手配をするから……。巴山虎と倚海龍と云ふ二人が承知致しましたと言つて是から阿母を迎へに出掛けました、出掛けると悟空も又巴山虎の肩へ捉まつてソ〳〵出掛た　巴山「オイ倚海龍　倚海「エヽ　巴山「家の大王なんぞは剛毅あるんだ色々お寶物がある、七星劍と云ふのは劍が一本のやうだけれども愈々其所へ向ふと七所で働くと云ふのだ　倚海「フーム

巴山「芭蕉扇あんぞは大變あるものだ一つ煽らうものなら忽ち大地から火を放つて三百里でも五百里でも一遍に火になると云ふのだ　倚海「剛毅なものを持てるな　巴山「内の親分は幾ら強悟空が神術を知つて居たつて負やアしない、何うしたつて元が猿だもの高の知れたものだ。詰しをしながら行く肩へ掴まつて居て悟空、此野郎色々なことを言やアがる一つ懲かしてやらうと思つて悟空力を入れてウーンと虫にかつて居て押ものでざいまそから巴山虎懲ろいた　巴山「恐ろしく肩が張つて來た倚海「肩が張る、氣を付ねへと往けねへそ、風を引くせ。何を言やが風あんぞ引くものかと悟空自分の姿を見せないやうにして巴山虎の脇の下をくそぐつた、巴山虎は懲ろいて　巴山「オイ冗談しちやア往けねへぢやねへか　倚海「俺は何にもしやアしないこ、二間も離て居ぢやアねへか　巴山「懲だせ　倚海ソレはお前が變だ〳〵と思ふか變だ、もう悟空だつて何だつて逃げて仕舞つたんだから居る氣遊ひはねへ。と道を急いで參りまする歴龍山歴龍洞の窟へ參つて　二人「エ、御免下さい御隠居様今日は……奥から出て來たのを見ると身の丈は勝れ両眼の光り鋭くもう年は六十にもありませうか、老婆でございます　老婆「オッ倚海龍に巴山虎何か用があつて御出か　巴山「ヘエ御老母様へ申上げますが今度唐朝から西天竺へ參りまする坊主が參りまして付いて居りまそ者に八戒に沙悟淨、悟空と云ふ者がございまそから三人は疾く捕へてありまそが孫悟空と云ふ奴が何うも神變不思議な奴で、尋常に押へることが出來ません到頭二品の宝物を取られまそやうな譯で、恐々其奴を押へて仕舞つて彼等の肉を大王も召上がり御老母様にも遊上げへいと云ふことで魔いては梶金繩を御持ちなそつて私

くし非と一緒に何うか蓮花洞へ御出下さいまもやう、斯う大王が仰せられました　老婆「さうかと、ソレぢやア直ぐに是から行かう　巴山「へエ直ぐに御出下さいまもか、御留守は……　老婆「留守は其中に誰か來てやるだらう、斯う云ふ所へ何一品盗むものもなし……　巴山「さうでございます別段に泥棒も來る氣遣いはなし御安心でございまもけれども戸締りをして御出あさいませんと危なうございまもから……。是から婆さん直ぐに支度をして二人の者が手を引いて表へ出た　巴山「御壯健でございますお阿母さんは……　老婆「私しは壯健たけれども、併し年を老ると足が悪くなつて……　巴山「もう何でございまもネ、御老人でムい升からつて六阿彌陀へでも御出でなさいますか　老婆「私しは六阿彌陀へ行つたことはないよ。さうだらう怪物が六阿彌陀へ行つたので仕方がない　倚海「貴所はモ老人のやう

でございませんネ、御歯が宜うございますネ　老婆「私しは歯の方は大丈夫だ　倚海「結構でございまもネ。両人ながら御世辞を言いながら婆さんを連れて來る、孫悟空婆さんの様子を見て居たが耳の中から如意棒を取出してブウーンと打振うどアッと言つたが堪りまもせん老婆に於ては肩先の所を悟空の大力怪力を以て打たれたみとゆる身体忽ち粉の如くになつた、巴山虎倚海龍の二人は慌ろいて逃げんとする所を横へ打振つたことゆる巴山虎は胴体真二つにあつて北所へ倒れる、倚海龍逃げやうとする所を後背から力任せに撲つたから何かは以て堪りませう、忽ち其所へ死したる様子、悟空ニッコリ笑つて　悟空「何だ此奴等は……。死したる老婆の様子を暫らく見て居ると成程歩いて來た時は老婆のやうでございますが少時經つと是が九尾の狐だ彼の懐中にありましたる枕金縄と云ふ縄之を悟空自

分の懐中へ藏めて三つの死骸は谷間へ蹴込んで仕舞て　悟空「先づ是で宜い。と脱て毛を拔いて一本の毛を巴山虎にして一本の毛を倚海龍になし、自分は老婆になつて蓮花洞へ歸つて來た巴山「ヘエー唯今歸りました。巴山虎が先へ立つて道入つて來るとまだ酒を飲んで居た　金角「オヽ何うした　巴山「阿母さんを御連れ申しました。親と云ふ名があるものでございまそから金角大王銀角大王は其所へ出ましてさいました、巴山虎から申上げたでございませうが　老母「私しも其事を聞いて來たのだよ、何かい、孫悟空はもう捕まつたのかい　金角「捕まれば別段に御出を願はんでも宜しうございまそがまだ捕まへるよとが出來ません、ソレゆゑ其梶金繩を御持參を願つたのでございまそ　老母「さうかい梶金繩は持つて來たよ、けれども悟空だからつて梶金繩を投げてやれば雜作はない

金角「阿母さん之を一ッ召上がりましにがございい升から　老母「オヤさうかい中央の椅子へ腰を懸けて金角銀角を右と左へ置いて彷彿にあつた大きな器へ自身で酒を汲んで飲み始じめた金角「阿母さん奇態ぢやございませんか貴所は酒を召上がつたことはないのに今日に限つて召上がると云ふのは……　老母「ソレがお前何う云ふものか今日は酒が飲みたくつて堪らないとガブ〳〵飲んで前にある肉を手掴みにして食ひ始めた、金角も銀角も驚ろいて　金角「御年を老つて其樣あゐとをしては御身体の毒でございまそ。と云ふのも構はぢバク〳〵食う食べるばかりではございません、口の中へ溜めて置くので阿母がバク〳〵食ひながら頬邊の所へ澤山貯めて居るから　金角「貴所は猿が物を食うやうでございまそね。悟空は可笑しいけれども構はやアしない　老母「お前親に其樣なことを言ふものがあるもの

か食べられるだけ食べるよ。金角も銀角も箸を出そこともで出來おい、さうだらう悟空貴は腹が空つてるものだからパク〳〵食う、段々もう暮つて來ると　老母「アハヽヽヽヽあヽ好い心持になつた　金角「オヤッ。見ると阿母の樣子が段々變て來た　金角「奇想だぜ是は……。樣子を見て居る中に、忽まちの間にヒラリッと其所へ本体を現はし側にわつたる倚海龍巴山虎が見せたるのを忽まち元の通り毛を藏めて仕舞ひまそると金角の前へスックリ立上がつたることにして　悟空「ヤイ吾を何だと心得る齋天大聖孫悟空あり、サア尋常に師匠を始め弟々子を吾に渡さば宜し、さなきに於ては片ッ端から叩き殺そから覺悟をしろ。之を聞いたる金角銀角大いに怒つて　金角「汝吾が母を殺して此所に來つたに相違ない親の敵覺悟をしろ。と忽まちの間七星劍を拔いたるまとに致して打つて掛りまする悟空心得て北七星劍

をわしらつて居りまして如意棒を出して立上がつた、銀角大王大音を揚げたることにして　銀角「兄上心を勞するまとなかれ是れしきの者某者が討つて呉れん。と忽まちの間銀角大王に於ては現はれ出でたることにして暫らく悟空を相手に打合つたり、悟空此の時に至り心の中に思ひけるは幸わひ盜み取つたる梲金繩を以つて彼れを生抽つて呉れやうと心得たるから悟空打合つて居る其の暇に早くも梲金繩を取出したることにしてブウーンと銀角大王に投付けたるの樣子あり、所が悟空は俗に言ふ猿怜悧で此の繩を投げさへすればシッカリ綿れると云ふことを聞いて居るから投げた然るに此繩は呪文を唱へて投けるのでございまそから何にもあらあい、ブウーンと投げたる時に銀角大王に於ては　銀角「扨は梲金繩は汝が盜みたるか然れども之れを用ひる法を知らずして投げ付けるまろ思かれ。と自

分は手馴れて居りまもる品呪文を唱へますると忽まち其の繩が小戻りをして來て悟空の身体をグル〳〵と卷いた、悟空投げたる繩で自分の身体をスッカり縛られた　悟空「往けねへ〳〵此んな畜生。銀角カラ〳〵と嘲笑ひましたることにして　銀角「此の猿め已れ盗み取つたる梶金繩を投げて此の銀角を縛さんとそると雖ども梶金繩の遣ひ方を知らざる奴……金角喜ろおんで　金角「占めた〳〵。振ら下げて置け〳〵。忽まちの間縛つた儘振ら下げて二つ三つ頭を殴られた　悟空「往けねへ〳〵、無闇に殴つない無隠に打つと吐くを食ひたてた　金角「阿母でおいと思つた、パク〳〵　物を食ひやがる傍はらのところへ引据えて置いたさしもの悟空も梶金繩の爲めに縛されたから如何共仕方がおい其の中に二人が再び椅子に向つて　金角「彼奴が飲みやがつたんで酒も何もなくなつて仕舞つた、もう一杯飲んで仕引

に取掛らう。と金角銀角が再び大盃を擧げて酒を飲んで居る、梶金繩の爲に縛されて居ります悟空如何致しまもるか次席に於て申し上げます、

第八席

悟空は梶金繩の爲に縛されて窟の隅の所へ置かれ、金角銀角の二人は再び酒を飲んで居りまもる、大抵の者から此梶金繩で縛されたら何うにも身体が自由にならぬ筈でございまもなれども　悟空「繩抜をもる位は何の雜作もない　悟空「思議の孫悟空、繩抜をもる位は何の雜作もない　笞棒め斯様なもので縛られたつて抜けるよとが出來ないやうな其様な不都合の身体ぢやアないと」嘯て毛を抜いて梶金繩で縛られて居る自分の姿を拵らへて彼の繩は悟空懷中に滅めてソーッと出て來た二人で酒を飲んで居る其間を通つて前に積る上てあつた麵麭を一掴み掴んで飛出した、金角は麵麭が急に少

なくなつたのを見て　金角「何だつて貴様一遍に麺麭おどを食うのだ　銀角「食やアしない　金角「ソレでも彼様にわつたのが無くなつて仕舞つた。石門の此方へ出ると悟空忽ち姿を現はして　悟空「ヤーイ金角銀角此所へ出でろ　二人「オヤッ又出でやがつた　悟空「是しきなる縄に縛られて動くことが出て来ないやうな齊天大聖孫悟空ではない、イザ此所へ来つて降参おし、一旦其方等の手に取押へられたる師を始として吾が弟々子二人を速やかに渡さば宜し、さなきに於ては二人共に此所に於て一命を絶が何うだ。と大聲を揚げて呼はつたる時に金角驚いたることにして振返つて見れば片隅の所に梶金縄に縛されて居る悟空の姿があつて又石門の前に丈彼是れ八尺はかりに致して金箍棒を揚さへたる悟空の姿を見たることゆゑ　金角「扨こそ彼を以て変を設したに相違ない、其義ならば……。と傍へにあつ

た金紅葫蘆を取出した、此金紅葫蘆と云ふのは瓢箪でございます、固より此三寶物の中の第一の寶物と云ふ位の瓢箪、下の方へ其瓢箪の口を向けて置いて金角大君を揚げたることにして金角「ヤア〳〵齊天大聖孫悟空と呼はつたる時に悟空迂濶して悟空「何だと答へるとスーッと瓢壺の中へ這入つて仕舞つた　アヽ往けねへ〳〵往けないと云ふ中に瓢箪の口をピタリッと締めて十分に口をして目張をして仕舞つた　金角「銀角何うだ　銀角「ヤア何うも阿兄旨いことをやつな　金角「彼れ術を以て梶金縄を抜出ると雖ども吾家の寶物金紅葫蘆の中へ這入れば最う大丈夫、口をシッかりして空氣の漏ないやうにして置けば今に身体溶解けて清水になる、ソレを飲めば不老不死の薬になるからソックリして置け　銀角「ウム何うも宜いことをやつた　金角「サア〳〵もう宜い、野郎縛つて置ても飛出そうから始

来に往けれへ奴だが此度ばかりは何うすることも出来ないと雨大王は大きに喜こんで居る瓢箪の中へ這入った孫悟空　悟空「ろいたな是は何うも……ソンなことを聞いて居たつけ、返事をすれば其中へ吸込まれる、迂闊返事をして仕舞つた、此中へ這入つてると身体が腐つて仕舞う……オヤ〳〵　少し足の方から危ねへせ……オヤ是は大変だ、些と腐り掛つて来たぞ、是は往けねへ、迂闊して居ると溶解けて仕舞うぞ。固より神通力を得て居ります悟空、葫蘆の中で身を固くし、法を結んで身体を全たうして居る、今に必ず開ける、開けたら飛出してやらうと考へた、一時間ばかり其儘に成て　銀角「阿兄もう宜からうか　金角「さうさな、大抵三十分経てば溶解けて仕舞う、もう一時間も経つたから大抵宜からうから、振つて見ろ〳〵　中で水の音がすればもう溶解たんだから……瓢箪の中かにて聞いて居た悟空が　悟空「ヤ

ア振つて見ろッて言やがる水の音をさせねへと何時まで此中へ入れて置く其中には苦しくある。ト綱り言を言つて居る中に銀角其葫蘆を取つて振り始めた悟空落ろいた　悟空「コイッは目が廻らア酷いことをしやがる。瓢箪の中で　悟空「ゴトン〳〵。悟空口の中で水の假聲をやつてる　銀角「阿兄音とがする〳〵、金角「音がするか、音がすれば大抵水にかつたらう口を開けて見ろ。口を開けると悟空毛を抜いて自分の身体が半分溶解けたやうなものを拵らへて本身は小さい出とかつて葫蘆の口から飛出してテーブルの脚へ来て留つた　銀角「阿兄見ねへ、まだ半分しら腐らねへ　金角「さうだらう彼様な奴だから何うしても水になるのが遅い、其儘にしてもう一時間ばかり置け空氣が漏れると往けねへせ、もう一杯飲んでる中には水になるだらう、水にかつたら二人で飲もう　銀角「さうしやう。彼らの所へ其瓢箪を

置いて金角銀角酒が好きだものだからガ〳〵食つてる樣子を見て居た悟空、又一本の毛を拔いて忽ちの間に瓢簞を拵らへて其處へ置いて例の葫蘆は自分の懷中へ入れて仕舞つてプウーッと石門を飛出して仕舞つた　悟空「もう是で宜い野郎何うするか見ろ。金角は　金角「銀角葫蘆はあるか　銀角「アヽ此處に金紅葫蘆はある　金角「大丈夫か　銀角「大丈夫だとも……。石門の此方に大雷の如き鼾を放つたることにして　悟空「如何に金角此所へ出ろ、銀角あらば此所へ出ろ兩人共に此所へ來つて齊天大聖孫悟空と勝負に及べ　兩人「野郎又出やがつた。金角大いに怒つたることにして　金角「銀角汝至つて彼を退治せべし心得たりと銀角に於ては再び立上がつたることにして忽ち傍へにあつた葫蘆を取つて立出で空へ向けて　銀角「如何に齊天大聖孫悟空と呼はつた、悟空眼の中で野郎本物は俺が持つてきちやつたんだい　悟空「何だ〳〵　何だ〳〵。驚けて返事をすると雖ども少しも葫蘆の中へ這入つて來ない、銀角此時に氣を焦つたるあとにして　銀角「齊天大聖孫悟空　悟空「何だつたら、先刻から返事をして居らア吸込んで見ろい　銀角「是は變だぞ此葫蘆は……少し此金紅葫蘆は腐つたか知らん、……齊天大聖孫悟空　悟空「五月蠅お何時まで其樣なことを言つてるんだ、箒棒めへ其樣な破れ瓢簞へ吸込まれるやうお孫悟空ぢやねへや、俺の方にもこう云ふやふな寶物を一つ持つて居るんだ、……如何に銀角大王此時に銀角吾を忘れて　銀角「何だ。ヒ返事をしるとスーッと這入つた、反對を喰つちまつた忽ちの間口を締めて仕舞つて空氣の洩れおいやうにして二つ三つ振つた　悟空「野郎もう溶けて仕舞やアがつた其銀角大王の溶けたる水をゴトン〳〵やりあがら再び石門の所へ現はれたる事にして　悟空

如何に金角汝の弟銀角は吾れ此葫蘆の中に盛込んだり、サア此上共に吾師を始め三人の者を吾に渡さゞんば其方も共に之へ盛込んで仕舞うが何うだ。と云ふと其所へ進んだ、金角之を聞いて大いに怒つて　金角「扨は吾が舎弟銀角は汝の爲に此葫蘆の中に盛込まれたるか其義ならば用捨はせん。と忽ちの間槍を取つて其所へ立出でた、悟空は葫蘆を腰に纏めたることにして如意棒を取出して金角を對手に打合つて居たが何うして打物を取つての働らきは中々金角の及ぶ所ではございません、トッ〳〵トッ〳〵逃去る樣子、追掛けて打たんとする所を体を蛟りましたる金角究然腰に抑して居りました芭蕉扇を取つて一つブッーンと煽ひだ、何かは以て堪らんや此芭蕉扇に煽がれると さしもの齊天大聖孫悟空の如き者かブッーッと七十里ばかり飛んだ悟空「此ん畜生酷いもので煽ぎやがつた

其儀あらば……。と、又戻つて打つて掛らうとする間に再び其芭蕉扇でパッ〳〵パッ〳〵烈しく煽ぐと忽ちの間平地火焔と相成りましたることにして三百里ばかりの間が一面にパアーッと燃上がつた、孫悟空驚ろいた奴の一番驚ろくのは火でございます、火と水は平常から恐れて居る忽ち燃上がつたから悟空驚ろいて如意棒を振いで觔斗雲に乘つて空へ飛び上がつた悟空「ア、熱い〳〵彼ん畜生に飛んでもねへことをしやがる彼樣な團扇で煽ぎやアがつて本當に忌々しい奴だ、何うもるか見やがれ。金角は頻りに煽いで居る、悟空忽ちの間に變化をして何時の間にか蓮花洞の窟の方へ來て見ると小怪物が大勢居る道入つて來ると忽ち片ッ端から撲殺し始めた、小怪物は驚ろいて、ソレ悟空が來たと名々押へんとしたが何うして一人として悟空に勝つべき者はございません、見る〳〵間に三十人ばか

りの者を一度に撲殺して仕舞つた、振返つて見ると遊か向ふで金角は一生懸命踏いて居る　悟空「馬鹿野郎俺が居ないのに踏いて居やがる奥へ來つて見ると片隅の柱に三藏沙悟淨の二人は縛されて今や食はれるか今命を絶たれるかと思つて居る、悟空「御師匠様〳〵、三藏「アッ行者か　悟空「エ嘘ぞ御心配なさいましたらう、もう大事でございません、奴等の持つてる寶物は皆な私くしが踏んで仕舞つたんで、もう奴等は何うすることも出來ませんまだ一品芭蕉扇と云ふのを持つて今媚いで居るんで幾ら媚いだつて大丈夫でございます、今繩を解いて御助け申しませうから孫悟空が來たと思し召して貴僧は安心をしてソレッきりになつては仕方がございませんからシッカリしてお在なさいまし、悟淨何うした　悟空「さうだらう手前達は此繩を解くことは、は一通りでない　悟淨「阿兄能く來て呉れた、此繩り様

知るめへ俺に解いてやるから……師匠様シッカリしてお在なさい、……八戒は何處へ行きやがつた助倍野郎は……八戒々々八戒「此處だ〳〵　悟空「何處に居るんだ　八戒「池のおかだ　悟空「池の中だ　八戒「阿兄助けて呉んねへ何うも酷いことをしやがつて人を縛つて池の中へ投り込んで置いて明日食うと云ふのだ　悟空「池の中に居るのか　八戒「池の中に居るんだ、縛られて居るから何うすることも出來ねへ何うか阿兄出して呉んねへ　悟空「今俺が出してやるから待つてろ　八戒「後生だ早やく出して呉んねへ　悟空「さうでねへ、チャーンと物は順にしねへと往けねへ　八戒「何處へ行くんだ　悟空「俺は一寸天上へ行つて來るんだ　八戒「天上へ……何だつて天上へ行くんだ　悟空「此の金紅葫蘆や梶金繩あるぞと云ふものは言ふまでもないが夢老仙人の寶物だ日外亡失つたと言ふあとを御有つたから返を

ものは先へ返して上げてソレからのことよ　八戒「其様なものを返すのは後にして……　悟空「貴様は其様お了簡だから困けぬ、返すものは返して、仙人に安心をさせて置いてソレから助けてやる　八戒「其中に怪物が帰つて来たら大変ぢやねへか　悟空「ナニ大丈夫だ、急に帰りやアしねへ。何でも俺を焼殺さうと思つて無闇に煽いで居る、悟空忽ちの間に中天に至りまして金紅渤蓋でございますの或は梲金繩だのと云ふものを李老仙人の所へ之を届げた、仙人大いに喜ぶんで　李老「悟空何うして貴様が之を手に入れた　悟空「斯う〳〵　斯う云ふ訳、今もう一品の芭蕉扇は今御届け申しますが、此者が手許にあると働らきが出来ませんから御返し申しました　李老「何うも厚じけない、一度失なつたる貴物を再び手に入つたるは全たく其方の働らきに依る所であると。一礼を述べるから　悟空「ナニ礼なんぞは仰有らなくつても宜しうございます、又御師匠様や私くし其の身体に用遊のわつた時は何うか御願ひ申しますと、李老仙人に委細頼んで戻つて来て見ると未だ金角帰つて来ない、毛を十本ばかり抜いて小怪物に拵らへ、自分も小怪物になつて待つて居た所へ金角芭蕉扇を提げて帰つて来た　悟空「ア、帰つて来やがつた……　ヘエ頭御帰んなさい、何うしました孫悟空は……　金角「イヤあの位私が火を放して煽いだからもう大体焼いて仕舞つた、彼奴は外のものでは何だけれども火には叶はねへから……　ア、がつかりした、マア少し寝おくつちやアおられへ　悟空「御寝みなさい、金角来る氣遣ひもおからうけれども悟空が此所へ来たら油断をするな　悟空「ヘエ悟空が来たら起しますから御寝みなさい、私くしが番をして居れば大丈夫でございます。労れたものと見えて金角は横にあると其儘グウ〳〵眠つて仕

縛つた、孫悟空寐る樣子を見届けたから奥へ行つて師匠の繩を解き悟淨の繩を解いてやり池の中から八戒を引張り上げた、八戒水服れに服れて仕舞つた　八戒「阿兄有難う御前が來おければもう少しで死んで仕舞う所だ　悟空「馬鹿野郎　三藏「此上からは直ぐに此所を退散するか　悟空「マア御待あさい、金角と云ふ奴を叩つ殺して行かないと何をするか知れませんから……三藏「宜いかお　悟空「宜しうございます……二人は師匠樣の側にチャンとして居ろ、俺が行つて金角を退治して仕舞うから八戒宜いかい　悟空「大丈夫だ手前達とは違う。悟空忽ち小怪物の姿で金角の側へ來ると金角寐て居ながらも油斷はしない彼の巴蕉扇と云ふ寶物をシッかり持つて寐て居やがる此樣なもので焼かれて堪るものかと盡所へ行つて澁團扇を持つて來て、金角のシッかり握つてる其指をソーッと緩めて持つて居た芭蕉扇を取つて仕舞つて澁團扇を持ってグーく寐て居る　悟空「占めく〳〵ソイッを持つて中天へ飛んで行つた、忙がしいこと大變だ　悟空「エ、仙人團扇を取つて來ました　李老「何うも悟空色々厚じけない　悟空「もう大丈夫だ野郎の手に此團扇があかつた日には形無しでございます。李老仙人の所へ彼の芭蕉扇を返して再ひ石門の所へ來ると大音を揚げて　悟空「ヤイ齊天大聖孫悟空此所へ罷越したり、金角目を覺まして勝負をしろ。と呼はつた、金角驚ろいて目を覺して見ると悟空其所へ現はれた樣子　金角「扨は汝燒殘つて此所へ來りしか、其義ならば今一度汝を燒いて呉れん。と金角持つて居た團扇でパタ〳〵焼いた　悟空「何をして居るんだ、此野郎澁團扇で焼いだつて仕方がねへ。金角見ると驚ろいたの何のつて持つて居た芭蕉扇が何時か澁團扇になつた

喚ばして其所へ投出し、槍を取つて向はんとする所へ悟空飛込み來つて打つたから何かは堪りません、一棒の下に腦天碎けてパッタリ其所へ倒れる、飛掛つてフッ〳〵フッ〳〵　恰然塩辛のやうにして仕舞つた　悟空「御師匠様、貴僧は殺生をするあと仰有るが斯う云ふものを助けて置けば人民が困ります、御覽なさい怪物を退治して仕舞つたんで。八戒と沙悟淨傍らに之を見て居たが　二人「何うしたつて阿兄には叶はねへ。ソコで悟空は一旦自分の姿と致したる毛を藏めて此蓮花洞と云ふ所を立出でまして龍馬は如何いたしたるかと改ためると幸ひにして是も近傍の水に繋いでありましたるとゆゑ、彼の龍馬に三藏法師を乘せまして悟空、八戒、沙悟淨の三人御供をいたして是より西の方を指して參ります。

第九席

既に日を重ねて參りたした所が白水洞と云ふ所に掛りました此十日ばかり此方は怪物にも出會ぬ別段に飢えると云ふこともなく、幸ひにして宿へ著き食事をして歩きますから大きに三藏も喜ぶび付いて居りまする悟空八戒等に於ても何れも無事に參りまする、名々耳を立つて聞くとワアーッと云ふ聲が遥か遠方で致しまを　悟空「御師匠様少し御待ち下さい　三藏「何だ悟空「何だか此先に大層大勢でワア〳〵　言つて居ります、猥りに行つて宜いか悪いか知れませんから少し御休息あさい、私くしが參つて様子を見て來ませう　三藏「さうか　悟空「悟淨と八戒は能く御師匠様の番をして居ろ手前達は時々油斷をしちやアご御師匠様を持つてかれたり何かする、八戒又寢ちやア往けねへせ　八戒「寐やアしねへ、無闇に寢る奴があるものか　悟空「嘘を吐け手前は何處でも掛はず、寢たり女を見て涎を垂して居る癖

に……八戒「ばかり叱言を言つてる」悟空忽ちの間身を躍らせ雲へ乗つて參り見ると向ふに一城廓が搆へてございまして何うも其城廓の美麗なること夥だしく其城廓から見ると彼是れ三里ばかり手前でございまして五六百人の僧が細濯を掛けたり或は草鞋を穿くのもあれば挙かないのもあり、車へ水石を乗せましたのが何十両共かくありまして、ソレを曳いたり押したりして行く僧ではあるけれども何れも病僧ばかりで、荷が重いと見へて四五間行くとは車を止めて息を入れて居る、悟空は暫らく見て居たが　悟空「是は奇態だ人足が皆な坊主だ法衣なんだを腰へ巻付けたりなどして居る様子を見ると坊主の國か知らんけれども斯う云ふ賤業を出家がをると云ふのは可笑しいと身を轉じて自分に於ても禪家雲水の僧になつて名々に車を止めて休んで居る所へ參り　悟空「へエ何うも御精が出ますな

之を聞くと大勢の僧は悟空の様子を見たが本身を變じて禪家の雲水の僧の姿でおざいますから　僧「エ、もし〳〵貴所は是から何處へ御出なさる　悟空「私くしは西の方へ用があつて行くので雲水の者でござるが貴僧達は何で斯う云ふことをして居なさる　僧「誠にさう御尋ねがあつては一言の御返答にも困みまを位で、佛へ仕へる出家の身が御覽の通り誠に情無いことを致して居る、是は何も自分共が好んで斯様に致す譯ではない唯々天命を待つて死に至る時があらば速やかに死地に入らうと云ふ覺悟をして居りますと涙を流して話しをした　悟空「へエ是は奇態だ貴僧達はさうやつて車を押したりなどしあがら唯死地に入るのを待つ、死ぬのを待つと云ふのは可笑しい、全体此處は何と云ふ國だ　僧「されば此所は國の界でござるが此國は車遲國と申して吾々は其車遲國に在つて大寺を搆へて居

た者で然る所七年以前に國王病氣の際全快の願の祈を仰付けられて老僧初めとして吾々共打集ひ願りに國王の病氣全快を祈りましれ所か少しも効驗がない何う云ふ譯で御病氣が癒らぬものであらうかと思ふて居る時に不思議にも上天より致して三人の仙人を下し給ふて其三人の仙人と云ふのが直ちに國王に見え出家などが幾ら祈願を遂げ全治を祈ると雖ども全快をしない吾々三人へ仰付けられれば國王の病氣を立所に治そと腕つて出た掛官に於ても早速に奏聞を遂げると國王病中あがらソレを許され依つて三人が玉座近くへ參つて祈ること僅か七日にして既に御一命も危ういと云ふ位の御病氣が全快をした御全快にあつたに付いて國王悦とく彼の三人の仙人を敬禮し給ふ此三人の仙人と云ふのが佛法を破滅なし、悪とく此國を改良せんとするの有樣出家を嫌ふふと一通りならず國王又御

自身の病氣全快をしたに付いて何事も其三人の言ふ事を用ひ遂には政治に口を出せやうになり出家たる者は何れも寺を開き或は業を傳へるもあり、實に何うも慳貪極りもなく恐らく此七年此方僧として斯られたる者二千人もある位、吾々共は命を惜むにはあらざれども其中には國王の心願へり佛法を歸依し給ふ時があるであらう、吾々共か落命をして仕舞へばソレまでと思ひ今日は仙人の言ふことを何事に依らず用ひ從がつて居るが爲に一命は助けられるやうなもの、一日に數三合宛を與へ此通りの荒業をさせられ之を怠る時は何樣の罪を着せられるか知れん付ては何うも有るに甲斐無き身の上でございまも悟空「フーム其仙人といふのが萬事車遲國のことを……

僧「イ何事に依らず國王此仙人へ仰付けられ、又仙人能く其事を遂げる

悟空「何といふ仙人だい

僧「第一は虎力仙人、第二を羊力

仙人、第三を鹿力仙人といふて實に雨を降らし、風を起し天變不思議のあとをする、神通を得て居る故に歸依するも無理にはあらぬと思へども中には邪法ではないかと思ふ者もあるが何分にも國王の之を信じ給ふて一通りならず、依つて吾々共は見らるゝ通り、車を押すも石を担ぐも一日に粟三合宛の手當の外に何一つ食そもなくされば見らるゝ通り五百人は何れも骨と皮ばかりに相成り、身体勞れて居て斯う云々荒業をするのを旅僧察し給へ、又二つには旅僧は知らずして是より車遲國に入り給ふ其時には愈々一命か危ういもう出家と見る時は忽ちまち捕へて首を斬ると云ふ、實に情無い有様もう里程三里を行き給はゞ車遲國あり、領分が遲へばこゝ此所に在する中は安堵なれども知らずして其國内に入り給へば官史直ちに來つて御身を捕へ首を斬に相違おいから此所を早く退散し給へ　悟空

さうかいソレは何うも氣の毒なことだお前達は一日に粟三合宛貰つてソレを食つて斯う云ふ荒業をするとは情無いあとだ國王如何に其仙人を信ずるからと言つてさう云ふことをして　僧イヱは良くない、お前達も何うか逃げでもしたら宜からう　僧何方へ逃去りました所が忽ち其仙人の仙術を以て捕へられたるに相違ござらんからソレ故に辛抱を致して居りまも是まで逃けて捕へられ、首を斬られたる者眼前に澤山見まして御座るから　悟空ぢやア逃げるあとも出來ないのかい可愛想なものだ何を樂しみにして居るんだい　僧此五百人の願ひ樂しみまするのは豫て承たまはります唐朝より西天竺へ敬文を取りに御出なさる德僧であるとのこと、其德僧の供をせられます齊天大聖孫悟空と云ふ神變不思議の人があるとのあと、願て此地へ來りかば其御力の袖に付き何齊天大聖孫悟空といふ人に願

ふて何卒佛法を恢復せんことを願つて貰ひたいと思ひ、外に頼むべき人はない、歸日のやうに指を折つて其孫悟空と云ふ人が來るを相待ちます　悟空「さうか、ぢやア分つた、俺が悟空と云ふのだ　僧「へエ　悟空「俺が悟空と云ふのだよ　僧「へエ欺りを仰せられる、貴所は禪家の僧雲水の御方で　悟空「禪家の僧雲水の御方に見えるんだ、お前方がさう言つて俺のやうな者を惑つて悟空が來たら翻まう、唐僧が來たら其御方の袖へ縋つて佛法が盛んになるやうにして貰ひたいと云ひおさるおら別段に隠そ所もないから、サア……と忽ますの間に變化を致すと悟空其儘本身を其所へ現はした。本相を覩ると一同五百人の者が　僧「へエ恐れ入りました　悟空「ぢやア斯うをるが宜い、其樣なみを開くと默つて居られない、彩へて見ると其仙人と云ふ奴は怪物だ、國王は欺されて居るんだ、明日でも行つて一つ仙人に會つて樣子を見やう大言を揚ふやうだが此世界に俺を知らぬ者はねへ、仙人だつて俺を可愛がつて呉れる仙人もあれば交際つてる仙人もある虎力仙人だの羊力仙人だのと云ふのを聞ひたあとがあい事に因ると喰せ物だ怪物なら打つ殺して仕舞う退治て仕舞つて此國を改良してお前達が前々の通り法衣を身に纏つて佛法を十分保護をると云ふことに御師匠樣にも頼んでやるから車なんぞを曳いて粟や麥を貰つた所が仕方がないから早く逃げて仕舞へ貴樣達が居ると却つて面倒だから二三日何處かへ匿れて居るが宜いさうして三人の仙人を退治て仕舞つたと云ふことを聞いたら來るが宜いさうをれば先の通りにしてやる　僧「有難ございますが今申し上げる通りの次第で私くし共逃げやうと致しましても途中に官吏が居りまして捕へられまと　悟空「ソレは逃げられるやうにしてやるソレだけの

他授を数へやう　僧「ヘエ何うして逃げるのでございます　△
空「齊天大聖孫悟空が一緒に行くと云ふことになさば大丈夫誰
も捉へる者はない　僧「貴所が送つて下さいますか　悟空「さう
は往かれへ師匠様はじめ舎弟々子が待つてるから直ぐ送
つて行く譯に往かれへから俺の代理をやる　僧「代理を……
方が行くのでございます」悟空四邊を見て居たが忽ちの間に
身の毛を一掴み抜いた　悟空「サア手を出せ一本つゝやるから
僧「毛を一本づゝ貰つたつて仕方がございません　悟空「マア宜
いから……右の手で持つちやア往けない右の手は不淨だ左の
手で押へろ　僧「左の手で押へまして……　悟空「一同持つたか
い……二本持つちやア往けない一本持つのだ持つたかい　僧「
持ちましてございます　悟空「持つなら是から車遲國の方へ行
かれへで何處かへ行つて隠れて居ろ　僧「ヘエー此毛を何うし

まも　悟空「さうでもない官吏にでも逢ふことがあつたら齊天
大聖と斯う言ひさへすれは宜い齊天大聖と言つて毛を出せと
俺の姿になる　僧「ヘエー　悟空「一人や二人ぢやれへ五百人の
悟空が出來れば大抵の官吏は驚ろいて逃げる　僧「不思議な毛
でございまそな併し何うも仰有るばかりでは安心が出來ませ
んか大聖願はくば其術を此所に於て御見せ下さい　悟空「宜し
く貴様達が心配をするなら見せてやる左手へ持つて少し先
を出して大きな開をしてやつて見ろ齊天大聖孫悟空と云ふの
だ　僧「宜しうございまそと先へ立つてる痛僧　僧「齊天大聖孫
悟空と言ひながら左手へ持つて居たる彼の悟空の毛を一本出
すと忽ち如意棒を携さへ身の丈彼是れ八尺はかりの悟空が
現はれた　僧「ヤアー　悟空「ソレ見ろ何うだ貴様もやつて見ろ
と忽ち茲に五百人の悟空が出來た　悟空「其毛を亡失しやア

性けねへそ人に遇はねへ時は手の中に掴んで人が來たら齊天大聖孫悟空だ　僧「有難う存じまそ左樣ならば御言葉に隨ひす して參ります此石や車は何うしませう　悟空「其樣なものは打拾つて仕舞へ可愛想に腹が減つてるだらう　僧「腹は空つては居りません　悟空「滿腹いのか　僧「へエ腹の中が空つぽうなので空つてると云ふのは幾らか何か這入つて居るのでございますがもう何も這入つては居ないので　悟空「ヤレ〳〵可愛想に二三日經つと十分に食を與へ法衣を纏ふて今日を安々と送れるやうにしてやるから早く逃げあ〳〵　僧「有難う存じますと五百人の坊主名々悟空より致して一本づゝ毛を貰つて之を左の手に捧さへたる儘に逃出した悟空樣子を見て居たが　悟空「ア、宜い塩梅だ善根を施こした是ばかりは師匠樣に申上げても御怒りあざる氣遣へはないとソレから其城廓の樣子を一通り見て歸つて來た此方は三藏を始め八戒と沙悟淨の三人は悟空の歸るのを待つてた所が何分にも遲い　三藏「何處へ悟空は參つたらうな　悟淨「左樣でございまそな何處へ行者は參いつたのでございませう八戒行つて見て來ちやア何うだ　八戒「俺が見て來やう　悟淨「又寢るなよ　八戒「寢やアしない大丈夫だ御師匠樣私くしが參つて見て來まそ又乾度銘酒屋へでも這入つてるんでせう　三藏「其方ではあるまいし　八戒「御師匠樣まで其樣なことを仰有つては困りまそ今八戒が熊手を持つて雲へ乘つて行かうと思ふ所へ　悟空「今歸つて來たよ　八戒「冗談ぢやアねへ何うしたんだ阿兄寢てでも居たんたらう　悟空「馬鹿を言へ手前ぢやあるめへし寢て居る奴かあるか　三藏「行者何で斯樣に遲くなつたか　空「ヘエ御師匠樣へ申上げます斯樣々々斯う云ふ譯でございまそ　三藏「ア左樣か　悟空「餘り可愛

想でございますから五百人の僧を逃がしてやりました　三藏「イヤ其方は人を殺す時もあるが又さう云ふやうな善根を爲る時もある　悟空「ソレで五百人は悅こんで參りました併し其三人の仙人是は私くしの寄へでは何うも只物ではなからうと存じます兎にあれ此國へ來て此國の國王から通り手形を貰ひませんければ他の國へ參る譯になりません何しろ何方へか一泊して國王の印の捺つた通り手形を貰ふやうに致したいもので此盤海では何うか今日は車遲國へ這入らないで今晚一晚安々と御泊め申上げたいもので……と話しをして居る所へ向ふから一人の僧もう年は七十にもおりませうか杖を突いて來た樣子三藏之を見たから默禮を致しまもる先方の僧も禮を致す悟空其所へ參つて　悟空「老僧に御尋ね申しますが貴僧は車遲國の僧でございますか　老僧「イエ〳〵　御問及びかは知りませんが車遲國に僧と云ふ者はございませんが各自賤業を營み或は土方或は傭夫あるいは故あつて居ります　悟空「貴僧は能くさうやつて袈裟法衣を着けてゐ在なさる　老僧「是より北が即ち車遲國此邊は僧かゐ所で所領が違ひまを手前は直き此近傍の知淵寺と申する寺の住職にて此知淵寺には釋迦如來の眞筆がございるソレ故に彼の仙人も來らを從つて手前は今日まで命を全たう致して居る　悟空「ハヽーさうでございますか　悟空「此御方は此度唐朝よりして西老僧「各位は何方へ御出で天竺大雷音寺へ御出になる……　老僧「イヤ扨は豫て承知致して居る德僧に候かソレは幸ひの折柄誠に貧しき寺ではございますが唯今は手前一人で齋飯だにも十分に參らせる譯に參りませんが何うぞ今晚御泊り下し置かれますれば……　悟空「ソレは御老僧辱じけあうございます……　御師匠樣此知淵寺の住職が

今晩宿をもるとも申しまをから　三藏「ソレは何うも何より辱じけなく思ふ決して齋飯おどを下し假かれいでも唯雨露を凌ぎさへすれば宜しい　老僧「イヤそれだに御派知あれば御案内を致しませうとソコで此老僧案内を致して知淵寺と云ふのへ這入りました昔は大居お寺であつたらうけれども今は壊れて居りまして何うもひどい古寺依斐三藏は本堂に至りまするとお如來の御眞容大いなる懸物かありまを之へ對して三拜を爲し讀經をした三人の者も其所へ來つて敬を讃み旁々して居りまをると結飯を四つ木の葉の上へ載せて持參を致しました　老僧「徳僧を御泊め申上げたれど參らせる物もなく恐れ入りますが是は寸志でござるから何うか召上り下さるやうに三藏は喜ぶんで之を押戴き之を食した悟空も之を食べる沙悟淨も食べた八戒の奴は一呑に呑込んで仕舞つた　八戒「是は換りは來ねへ

のかい　悟空「馬鹿野郎だから貴様は馬鹿だと云ふのだ　八戒「是つきりかい　悟空「當り前だ　八戒「腹が減つて堪らねへや、もう一つ位呉れたつて宜さそうものだ　悟空「何を言ふのだ老僧が何と言つた斯う云ふ貧寺で差上ける物は無いが雨露を凌ぐだけならと云つたぢやねへか　八戒「雨露を凌いだつて腹がぐつちやア堪らねいアゝ忌だ〳〵　悟空「此方が忌だ老僧と悟らく話しをして居たがサア御寐みあさるやうにと云ふので四人を寐かした枕を並べて寐ると云ふことになる老僧は其所へ來つて　老僧「當寺にお在おされば怪しき仙人おとの參る氣遣ひもなし斯樣荒屋ではござるが何卒もござらんから御安心おもつて御寐みなさへ　三藏「辱じけおうゝござると名々枕に着く勞れて居るし安心をしたものと見えて三藏法師は良い心持に寐て八戒も沙悟淨も疲勞れて居るものだから　悟淨「グウ〳〵

何うも悟淨の聞と來た日には大變八戒の野郎ダラシもなく耳をダラリと下げて寐て仕舞つた寐ないのは悟空だ安心をしろと言つたつて安心は出來ない併し此寺が魔王が居る寺ぢやアないか明日は何うしたものであらう國王に手形を貰はなければ車遲國を通ることが出來ず何うも又一ッ苦勞が出來たと考へて居るとビイーヂヤ〳〵ンドーンと遠か離れては居りまするとけれども頻りに樂を奏しまする樣子　悟空「何だろう一ッ行つて見てやれと三人の寐息を窺へると三人あがら能く寐て居るのでございまもから　悟空「ソーッと庭前の所へ來ると呪文を唱へて忽ちまち雲を起し其雲へ乘るとプウッット北の方へ行つた雲間から見下しまもると向ふに何うも美々たる高樓がありまして其高樓には三清觀と云ふ樂を懸け其内を見ると大勢の小仙如へて居りまを中央の所に美麗き扮裝を爲して三人の

仙人坐して頻りに敎を讀んで居る樣子正面の所に三坐の木像を飾り其前の所を見ると莫大の供物何かくれとなく其所に積上げてある二百人ばかりの弟子と見にて頻りに其所に敎へを受つて居る樣子仙人は木像へ對して代る〳〵禮拜を遂げ事は分らぬけれども是から說敎でも始めやうと云ふ樣子だ悟空「雲の上より其樣子を見て　悟空「イヤア彼奴だな仙人と云ふのは三清觀と云ふのは是は敎場だ大層な供物が上つてらア待てよ明日行くまで一番供物や何か食つて樣ろかしてやらア俺が一人で食つたつて仕方がねへ食切れやしない喰扱けの八戒と沙悟淨を呼んで來て喰はしてやらう見屆けてから立歸つて見ると皆な能く寐て居る　悟空「悟淨　悟淨「アヽー何だ阿兄　悟空「起きな〳〵宜いことがあるから淨かにして御師匠樣が目を覺そと徃けねへから八戒を起せ　悟淨「オイ〳〵起きねへかオイ八

戒　八戒「ウムーン、ムニャ〳〵　悟淨「忌な奴だな起きねへか
八戒「起きねへかつたつて……ウーン」悟空其所へ來てダラリと
下つてる耳を捉まへてグッと引張つた　八戒「アヽ痛え　悟空「
靜かにしろ　八戒「阿兄耳を引張らなくつたつて宜いぢやねへ
かアヽ痛ね　悟空「手前腹が空つてるだらう　八戒「腹が空つて
たつて寐て仕舞へば分らねへ目が覺めると空つちやつた何か
喰物があるか　悟空「手前の腹一杯喰してやらう　八戒「ソレは
有難え　悟空「口を開くな馬鹿野郎此處にあるのぢやねへ　八
戒「何處にあるのだ　悟空「御師匠樣が目を覺さないやうにソロ
ッと行け途中で話しをするから……　熊手などを持つて行かを
と宜い　八戒「宜いかい　悟空「宜いとも〳〵　悟淨も何にも持つ
て行くな手ぶらで宜い喰ひに行くんだ　悟淨「近所の牛屋か
悟空「牛屋ぢやねへ　八戒「ソレは阿兄何だせ牛には限らねへよ

馬でも宜いよ　悟空「默つてろ手前見たやうな喰抜けな奴はね
へ途中へ出て　八戒「何だ〳〵　悟空「實は斯う〳〵云ふ譯だ
八戒「フーム　悟空「其處に居やがるのが三人の仙人だらう其前
に大層な供物だ酒もあれば何でもある　八戒「ソイッは有難え
な俺が一人で喰う　悟空「斯う云ふ野郎だ行つて見ろい中々一
人で喰切れるものか　八戒「大抵なら喰つちまう少し位腹が烈
げたつて捕はない話しをしながら來た、デヤン〳〵ポン〳〵、ピ
イー　八戒「何だいあれは……　悟空「それが其音樂だ　八戒「田
樂か　悟空「田樂ぢやアない音樂だ　八戒「音樂……喰へねいか
悟空「馬鹿だな此野郎は雲間から樣子を見ると何うも其敎場の
美々たるみと燈火万燈のやうに点いて居る大勢の弟子を集め
て今講義をするやうな有難前を見ると大層な供物正面には三
座の木像が飾付けてある悟空八戒沙悟淨の三人之を確と認め

て其の盗にして此の場へ入りましたか如何致しましをるか

第十回

其儘八戒は入らんとをるを悟空が留めて　悟空「待て〳〵此の姿で這入ると明日でも又車遅國へ行つて國王へ逢つた時に吃度わの仙人が出やがる成るたけ面の知れねへやうにして行かなければならない他が少し了簡がるから……と忽まち口に呪文を唱へるとブツーッと一遍に大風を起したから敎場に点いて居りましたる万燈忽まちの間盛ら上がる仕舞つた今仙人は弟子を呼んで講釋をして居る所へ右の大風眞闇になつた　仙人「アヽコレ〳〵　俄かに大風の起りしは何か天變がわるに相違ない斯う云ふ時に燈火を点けて講義をした所が役に立たんから敎へ殘したるゐとは明朝改めて又一座の敎へをして遣はをとも一同は退散をとるやう吾々も上院に退つて眠るであらうから……」弟子達は一同

弟子「左樣でございますが御免を蒙むりまする」と挨拶をして下院に來りましたることにして寐て仕舞つた三人の仙人も上院へ行つて樣子を見て居た悟空　悟空「何うだ一同居なくなつて仕舞つた　八戒「旨へお何うも……　悟空「茲で這入つて食ふに喰ひてへな　悟空「待て〳〵　喰ひたかは雜作もねへ　八戒「早く喰ひたい　八戒「何だいつてばかり居やがる」三人あがら敎場へ這入つて　八戒「何だい阿兄今点げたのは　悟空「今燈すを捜して居る丸つきり闇くつちやア往けねへと摺付木を取出して燈火を点ける悟空は色々あるものを持つてるサア何うも八戒や悟淨は喰うは〳〵　悟空「一寸待て〳〵　悟空「さうでもねへ此處へ人が　兩人「何た〳〵　悟空「さうでもねへ此處へ人が來た時に此扮裝をして居ては往けねへから茲で姿を變へるんだ　兩人「へエー何う姿を變へる　悟空「向ふに水僊が飾つてゐ

らアあの水像になるんだ　兩人「水像に……」　悟空「水像になつて喰つてれば宜いぢやないかさうして人が來たらゃャンとして居れればソレで宜い　兩人「道えねへソイッは宜いな」悟空近寄つて樣子を見ると正面に元始天尊の像左手に靈寶道君の像右手の方に太上老君の像がある　悟空「是で水像が此處にあつちやアあられへから八戒三つの水像を何處かへ打捨つて來い　八戒「塵溜へでも投り込まうか　悟空「塵溜じやア往げねへ裏の溝川へ投り込んで來い　八戒「喰つてからやらう　悟空「喰つてからぢやア往けれへ先に片付けろ　八戒「俺ばかり使うあ　悟空「宜いから早くしろ」八戒三つの水像を組つてコイッを擔いで裏に汚い流れがある其所へ持つてつて水像を投り込んだ　八戒「やつて來た〳〵　悟空「サア俺は元始天尊にあるから八戒手前は靈寶道君になれ沙悟淨は太上老君だ　兩人「宜し〳〵　姿を

見て居たのだから雜作ない忽まちの間に名々變化をして正面の所へ悟空が坐つて左方の所へ八戒右方へ沙悟淨三つの像になつてソレからパク〳〵食ひ始めた　悟空「燈火を消しとけ明るいと面倒だ水像の入換か濟んで仕舞つたら消した方が宜いと眞闇にして喰う間でも平氣だ　八戒「エーイ　悟空「八戒斷はつて置くぞ人が來た時に水像がエーイあんぞは往けねへぞ　八戒「食過ぎたい　悟空「さうだらう大抵喰つちまつた　八戒「俺は神酒を飲んだよ　悟空「ヤイ〳〵　何をとるんだい靈寶道君は耳を出して居る奴があるがもう少と唇を小さくしろ　八戒「食ひ醉つたものだから段々だらけて仕舞う　悟空「だらけちゃ往けねい　八戒「ア、何うも……　悟空「愚圖々々言ふな　八戒「つたな何うも……眞暗闇でムシャ〳〵殘つてる物を喰つてる茲に脫力仙人の弟子に法力と云ふ奴がある最前引取つて

来る時に自分の鈴を忘れて来た下院へ退つて来やうとしたけれども考へた又明日鈴が彼處にあると御師匠様に叱られる今夜の中に持つて来て置けば仔細はない燈火を点けて行つたら師匠に叱られると思つたから眞闇お敷場へ退入つて来て足音のしないやうに歩かうとそろと伺はゝ〳〵足音がそる手探りで頻りに鈴を探して居る　法力「確かに此邊りに置いたのだが何うも燈火がおいと頓と分らぬなと段々探つて来ると八戒の野郎ダラッなく聞だから宜いと思つて寝て居た手探りで来ると八戒の長い嘴の所へ手が障つた法力驚ろいて手を引込まして仕舞つた八戒も驚ろいてハタナ誰か俺の嘴を引張りやがつた法力又探つて来ると同じ所へ手が行つたものと見ねて八戒の鼻の穴へ指を突込んだ八戒驚ろいた　八戒「エヽハクシヨー〳〵〳〵〳〵と逃出し漸う此所を退散

すると法力上院へ罷越して　法力「先生大變が出来を致しました三仙人は　仙人「何だ騒々しい　法力「實は私くしは鈴を忘れましたから数場へ取りに参まをと水像が皆お寝て居ります　仙人ナニ水像が寝て居る　法力「寝て居るばかりではございません何かムヤ〳〵食べて居ります　虎力「ソレは一大事だ吾々共彼の所を退散したに付いて若し變化でも来つて右様狼藉をするかも知れんソレッと云ふと鹿力羊力を伴ひ茲に今を爲したることゆゑ忽ちの間下院に居ました二百人ばかりのものはドッと一度に来る　虎力「ソレ燈火の用意をしろとありましたから忽ち万燈のやうに燈火を点ける数場へ出て来ましたから悟空驚ろいて　悟空「八戒何かやりやアしねへか　八戒「俺が寝て居ると鼻の穴へ指を突込んだからハクシヨをした　悟空「笑つちや往けねへぞ宜いか　八戒「宜いよ」悟空眞面目で正

面の所へ扣ねて居る悟淨も八戒もコイツは大靈だと思ふからチャーンと水像におつて仕舞つた所へ澄火を点けてやつて來た仙人が見ると供物が一品もおいはは不思議なあとがあるものだ何うしたことかと思つて見ると正面にあります三つの水像が笑を含んで居る幾ら笑うまいと思つても大勢來たものでございまもから八戒や沙悟淨笑ひ掛けて居る仙人此樣子を見るより三拜を爲したることにして　虎力「アヽ辱じけなし吾が日頃より致して信ずる所に依り元始天尊を始め靈寶道君太上老君の方々即ち供へたる供物を食盡し下し置かれたるは何よりの喜こび此事を夜明けおば早々國王へ對して奏聞を致し尙ほ此上共に賜依あらんことを願ふてわらう……汝等一同に下院へ退つて居れ吾々三人三老へ對して相願むあとあり退つて居れと言はれたるから又もや一同の者ゾロ〳〵退つた三仙

人北所へ頭を下げ三拜九拜をして曰く　虎力「靈神等の御心にも叶ふて斯樣なる供物を一品殘ら忠食し給はりしは之を祭りたる抽者等の喜こび之に過ぎ此上は何卒靈神より長命不老の聖水を聊かたりとも賜はりなは如何ばかりか有難きことに存じ候あり此段御聞濟下し置かれたしと虎力仙人聲を放つて申入れる悟空之を聞いて暫らく考へた踏らねへことをしちやつて悪皆食つちまつたものだから其御禮に靈水を呉れ不老不死の水だ何うして呉れやうかと思つた小聲におつて二人りに向つて口を開くこと言付けて置いて悟空は其邊へ來ると驅がない聲を都かにして　悟空「如何に仙人汝等日頃よりして吾々を祈ること實に法に適い喜ぶべの餘りに供へたる供物殘らず今吾々にて食したり然るに靈水を賜むは適れ罷き靈みと申せる戯れども靈水の貯へ聊かにして濫りに之を遣はふこと叶

はず此上共に神を祭り十分に其志しを現はしあば其時にあそ金丹水を汝等に與ふべし　虎力「へエー未だ御心に叶はざるかは知らねども何卒聊かたりとも金丹水を賜はりあば有難きことに存じ候　悟空「重ねて申さば其盥みを叶へ遣はさん早々に器を此所へ持參いたせ道君にも老君にも申し早速に金丹靈水を遣はそべし　仙人「へエー」と三人は大きに喜ぶんで下院に至つて暫らくそると持參致しました三つの瓶を木像の前へ差置いた、悟空再び聲を抵くして　悟空今茲に靈水を與へんとすゆに汝等其所に在る時は大いの坊げを爲を暫時下院へ退つて休息をせい此瓶の中に靈水を入れあば其時にころ改めて汝等を招かん手を打つたら此所へ出でよとわつた三仙人大きに喜んで　仙人「何分にも願ひ奉つると其儘にして三つの瓶を其處へ置いて退つた　八戒「阿兄幾度お辭をして何うそるんだい

悟空「俺が天竺の假聲を遣つだのだ　八戒「其靈水とか云ふものがあるのかい　悟空「ナニあるものか　八戒「ソレでも受合つて何うそるのた　悟空「搏やアしない瓶の中へ小便をしろ　八戒「宜いかい　悟空「宜いからして仙人に食はしてやれ前にあつた瓶へ悟空シヤア〳〵小便をした、沙悟淨がそる八戒の奴は　八戒「何うも丁度宜い所だしたくつて堪らあかつた、アヽ良い心持ちたシヤ〳〵シヤ〳〵シヤア　悟空「長えぢやねへか其樣に澤山やつちやア往けねへ靈水は聊かだつてさう言つて置いた　八戒「仕方がねへ出物腫物だ何うだい些とは混せでも宜いかい　悟空「馬鹿を言へ混せちやア往けねへ　八戒「出たくあつた　悟空「汚いあとを言ふな斷はつて置くが今此處へ來ると目の前で喰はせるのだ笑つちやア往けねへぞ　八戒「食はせる……へエー食うかい　悟空「食はなくつて先方で靈水を藏いて不老不死

の藥にしやうと云ふのだから吃度食う　八戒ソイツは面白い瓶を前の所へ置いて悟空手を打つた、三人の仙人は再び其所へ罷越して禮拜をする　悟空如何に仙人望みに任して靈水を與へる其所に於て服ずべしとある虎力仙人大きに喜ごんで　虎力「へゝー吾が望を叶へ給ふて不老不死の靈水金丹水を給はることと辱じけなし」と又もや三拜を爲して早速に羊力鹿力兩人へ對して一つ宛の瓶を與へる兩人に於ても之を取上げ虎力仙人物に汲んで之を嘗めた嘗めると滋いやうな辛いやうな何うも此金丹水は餘程臭いけれども有難いと思ふから之を飲みやがつた羊力仙人は前へ出したのは八戒の一件物だ飲まうとする　と猪の小使でございますから何うも臭氣甚だしい羊力鼻を摘んで是は何うも大變だ何で斯う云ふやうな臭氣があるか靈寶道君が取分けて清淨な人だと云ふが何うも樣子を見ると靈水

少し怪しいと思つたけれども虎力仙人が飲んで居るものだから飲まなくつちやア惡からうと思つたから食つた御に見て居りやした鹿力仙人は悟淨の連れたやつを一口めたさしも忍耐性の良い悟空も可笑しくなつたからフツーッと笑ふ三人からワハヽヽヽと笑つた仙人大きに驚ろいて是は　と思ふ中にプウーッと悟空が忽ちの間に風を起したので又もや点火に於ては殘らず消して仕舞つた途端に三人何處かへ行つて仕舞つた漸く風も止んだるゆゑ再び点火を点じて見ると木像がおい扨は元始天尊は何方に御出になりしか靈寶道君は何れへと言つて頻りに尋ねる下院に居りました門弟等も方々聞べて見ると裏の溝川の中に三つの木像が縛られて投り込んであると云ふことが分つたので引上げ洗ひ清めたることにして仙人之を三拜九拜をするけれども何うも胸が惡くつて堪ら

ないさうだらう猿公の小便を飲んだのだ此方は三人　八戒「アヽ面白かつた阿兄今度道中をして今日位面白いみとはない喰物は腹さんく喰つて仙人に小便を飲ましてやつた、アヽ良い心持ちだ師匠様に言はうか　悟空「馬鹿を言へ師匠様はアヽ云ふ御方だから叱言を言ふ黙つてろ　八戒「さうか知湖寺へ歸つて見るとまだ三藏目が覺めずに能く御寐みにおつてるから其儘にして三人共に寢て仕舞うと夜が明けまをると再び粟の結飯を四つ持つて來た三藏は喜ぶんで一つの結飯を喰べたが三人あがら飲過ぎと喰過ぎで喰へないから三藏の召されまを龍馬此馬に別段に呼當もしない葦を喰はせるばかりも如何と思つて三ッの結飯を龍馬に與へたので三藏大きに喜てんだ所へ知湖寺の住職が來つて言ふには　老僧「是より北の方へ御出なさると御身の上に災難があるから願はくは北へ御出なさるなと

あつたが北へ行かかければ何に分手形を貰う譯にかりません茲で車遲國に入りまして國王の面前に於て彼の三人の仙人と孫悟空互ひに術を較べまをるの一條に相成りをを

第十一席

既に三藏を始め四人の者は車遲國の驛へ入らんとをる然る所が正面に美麗ある大門を構へ其嚴重なるみと移だしく通らんとをる所へ官吏四五名其所へ立出でヽ　官吏「御身等は何所へ通る者だ、三藏馬の上より　三藏「拙僧は唐朝の僧にして此度西天竺へ教文を取らんが爲に參る依奘三藏と申する者連れたる者は俺が弟子共なり決して怪しき者に候はず速やかに御通し下し置かれたい　官吏「イヤ〳〵當所には三ヶ所の石門を構へ濫りに之を通すことに相成らん國王へ國王より手形を申受けざれば通る譯にはならく僧達は待たれい右の由を奏問

致すでありう殿重なる言葉に三藏も是非に及ばず　三藏「何分宜しく御取次を願ひたいと馬を下つて相待つて居る暫時經ちまをると四人の者を此所へと云ふのでソレより案内に連れて通りました其殿重なるあと夥だしく又其美麗なること珠玉を連ね珊瑚を連べ實に目を驚ろかすばかり階段の脇の所に四人の者を引据に然る所正面の御簾が上りまをる、車遲國の王自ら其所へ出御在せられまして官吏は東西に扣へ其美々たる有樣に三藏も是まで通つたる國々隨分國王にも面謁致したが斯樣に殿重なる所は始めてだと思い禮を施します國王「其方等西天竺へ罷越をとのこと併し是まで程遠き唐朝より無事に來ること不思儀ふり姓名は何と云ふか　三藏「されは唯今小官更へ申入れたる通り拙僧は依美三藏と申す者是は孫行者、猪八戒沙悟淨と申をる弟子共にて候原はくは往來の手形下し置か

れなば急ぎ西天竺へ參り如來に拜謁して眞經の經文を申受けんの心底に御座る　國王「さらば汝等の身の上に怪しき樂動なくば速かに其往來の手形を遣はすべしと國王頻りに三藏の樣子に目を着けて在する所へ其義御無用ふり必ら彼等に於ては西天竺へ數文を取りに參る僧にあらず、君決して手形を遣はすあと無用にされい」と呼はる者がありますことゆゑ僧はと思いまして悟空始め樣子を見るると其所へ罷出でましたのは身の丈六尺にも餘り髮を捌き物凄き有樣でございまを其後に付いて來たのは何れも髮を捌いて居りもう餘程老いて居りまを樣子國王は之を見て、國王「大仙には何故あつて往來手形を遣はすを無用ふりと留め給ふぞ　仙人「されば此奴等は西天竺へ數文を取りに參るなどと云ふのは欺りの言にして其實何か巧計あつて國々を往來致する者に相違ない昨日五百人の四僧を誘

したるは即ち彼等が業なり又夜前に於ては三清觀へ混越し供物を食い尽し其上あらぎ靈水なりと申して大切なる瓶の中に小便を入れたるは全たく彼等が爲せる業なりソレを君知らぎして供物の手形を遺はしなば愈々彼等は此上如何なることを爲し此國を魔道に陥らしめんとするかも知れん　國王「オッ五百人の僧を逃がしたるは彼等が業なるか、三藏申譯わらは致せ何うぢや」三藏殆どさう云ふみうを知りませんから　三藏「是は何うも野僧身に取つて悉と迷惑致す中々右樣なることを致したる覺え……　虎力「無いとは言はせん斯く申する虎力大仙確と其場は立入つたり汝は致さずと雖ども同道を爲したる其探行者面赤が爲したる業に相違あるまい　悟空「イヤ是は甚だ迷惑を致します私くしは此國へ參つて道さへ知らぬ者、それが何うして右樣の惡戯を致しまして四僧五百人を逃したり三清

觀なんと云ふ所へ參つて供物を食なぞと云ふさういふやうな惡戯をした覺えはございませんの中へ小便をしたおぼと何うも怪しからんことで中々左樣なことを致した覺えはございません　虎「汝言巧みに申し逃れんとすると雖ども汝等ならでは三清觀に至り右樣の惡戯をする者はない其方一人ではあるまい其側に居る眼の圓い奴も唇の長い變な面をして居る奴も……諸八戒頭を上げて　八戒「變な面とは何の面でございまるあの位まづい物を食つたことはない　悟空「コレ〳〵　虎力「サア何うだ速かに白狀をするか　三藏「イヤ大仙の仰せ、三藏甚だ迷惑を致す此國の勝手さへ知らぬ者が右樣の惡戯を致すも無し又始終斯く申する三藏手許に差置く三人三清觀とか、記越して右樣供物を食べ或は此上もなき惡戯をするおぼと云ふに彼等に取つて覺えはあるまいし又斯く申する三藏聊かも覺

えないこと……

虎力「默れ汝等は此國を佛法に傾けんとする に相違あるまい佛法なぞは物の役に立たざるものだ七年以前 より佛を廢し神の力を借りて此國の安寧を計つて居る虎力羊 力鹿力の三人國王深く信じ下し置かれ罪有る所の僧是までの 間殺せる者數人と云ふ數を知らず然るに汝等此所へ來つて尙ほ も言葉を巧んで此國を佛に陷いれんとあすに相違あるまい速 かに元と來し道へ歸らは宜しさあきに於ては是非に及ばん此 場に至つて汝等四人の首を刎ねる何うだ速かに戻りなば命は 助けて遣はそ　三藏「是は虎力大仙の仰せには候へども國王別 段吾々共を誘すべきことを申さるに大仙進んで吾々共四 人を害せんとするは此意を得ぬ　虎力「默れ當國の政治は吾々 三人の與かる所國王の勅命も同樣愈々歸らざれば其分には捨 置かんぞと虎力仙人大いに怒つて居りまを樣子國王に於ては

大仙の言ふまゝを用ひるやうな次第然る所へ彷ちより罷出で ましたる者二名　役人「恐れながら奏聞仕まつります　國王「何 事だ　役人「豫て申上げ置きましたる通り今日までに百三十二 日の間一滴の雨も降らず依つて農民の慨き一通りならず願は くは一日も早く大仙の神力を以て雨を降し給はらん其時には 國内の喜こび此上なし速かに雨乞の義を願ひ奉まつると奏聞 をした國王之を聞召されたることにして　國王「大仙聞かれる 通りの次第なれば少しも早く雨乞を爲して人民を助け呉れま するやう　虎力「委細畏こまり奉つります然らは此國の農民を 助け後に彼等四人の處置を付けべき心底悟空之を傍で聞いて 居たが　悟空「エ、少々願ひます　虎力「何だ　悟空「唯今此所で 聞いて居りましたら大仙自ら雨乞をして農民を助けると云ふ ことでございますが失禮ながら何うも虎力仙人位のものが雨

請をしても迚も雨は降りますまい　虎力「默れ吾れ雨請をして雨を降さんと云ふことはおい汝如何かれば左樣なるふとを申すか　悟空「イヱ私くしは天文を知つて居るので此天氣では尋常の祈りを懸けましても中々雨の降る氣遣ひはございません此處に居ります手前の師匠此御方の佛力を以て祈りまを時には立所に雨を降しまを、虎力仙人如何に力を尽して雨を降さんとをると雖ども先づ一滴も降りません如何はくは手前の師匠三藏へ對して此雨請を仰付けられたい其時に雨を降らしめたる時には佛力の宏大なることを君に於ても知召して手形を揚へて吾々北四人速かに此國を通し給はりたい虎力仙人大口開いてから〳〵笑い出した　虎力「舌長の一言を吐くもの設吾れ此國へ來りしは既に今を去る七年前大旱魃にして良民之が爲に苦しみ田畑に於ては全然燒野同樣に相成り旣くこと一通り

ならず北砌り寺院の僧へ對して申付け雨請の祈禱を爲す者恐らく二千人餘の僧あり然れども一滴の雨を降らすこと能はず愈々一同の者之に苦しみ其時に此所に扣へし羊力、鹿方の兩人を伴い吾れ中天より此國へ來り國王へ見名雨請のことを願まれて吾れ雨を降らするふと三日三夜にして農民蘇生の思いを爲したり其時始めて佛力の足らざることを知り給ふて何れも此國を遠ざけ又強て此國に留まらんとする者は己を得ず首を刎ね或は種々の刑を行ふたり又此國に殘り暇業を爲さんとする者を助けたる數即ち五百人ければ是は罪人同樣なる者ゑり然るに此度雨請を爲さんとをるの際に汝此所へ來つて三藏雨請の得意ありとは如何にヤア此上からは吾と北力を較べん吾れ一度祈る時には風を起し再び銀を廻をる其時は雨を降し三度劍を廻す時は電雷を下し四度にして即ち雨霽れ快晴とす

ること即ち吾が法力の中にあり　悟空「ヘエー一度剣を動かも時には風が吹きまもかソレから雨が降つて雷鳴がして四度目に天氣快晴をする　虎力「左様　悟空「ソレは何でもございません手前の師匠は其様な祈りとは違うんで　虎力「何だ　悟空「雨を降らせやうと思へば斯うして居る間に直ぐ降る雷鳴おどは何でもない電光は良い力を遣います　虎力「電光に良いのと悪いのはございません願はくは此場に至り手前の師匠と力を較べ師匠三藏が雨を祈ることを速かでわつたら其時に國王にも迷惑を覺し手形を換へて吾々四人を西天竺の方へ進めて下さるやう國王始終の様子を聞いて居たか　國王「此場に至り唯辯論を爲すよりは大仙三藏と其力を較べられよ虎力之を聞いて　虎力「委細承知致したサア三藏然らば汝と此所に於て勁を較べん

三藏胸中に落ちいた悟空も詰らないことを言出した中々雨を祈るおどゝ云ふみとば三藏御存じない何うしたら宜からうと思召したさう云ふこと拙僧は出來ませんと言つたら此國を逃ることが出來ない、ソレばかりか次第に依つたら一命も危ういと思ひましたから悟空の顏を見ると悟空毛を拔いて変を遣り自分は虫となつて三藏の耳の側へ止つた　悟空「御師匠様御心配おさいまもな私くしが付いて居りまも雨を降らせるおんぞは雜作でございません彼處に居る虎力仙人などは邪法でございます邪を以て唯國王の志ざしを買つて始終は此國を魔國にしやうと云ふので固より魔物でございます私くしが付いて居ますから立派におやんさおい先に虎力仙人に祈らせる雨を降らせやうとそれば私くしが天上へ登つてスッカリソレを差止めて來ますから大丈夫でございます耳の側を小さな虫となつて

話をした、三藏之を御聞なさつて　三藏「さう云ふことなら宜しい其中に虫は歸つて參り再ひ毛を元の通りに藏めて相待つて居る三藏此時に聲を發し給ふて　三藏「如何にも大仙と此所に於て其爭ひを致さん吾れ勝ちかば速かに往來の手形を給はりたし　國王「如何にも其義承知致した此時に虎力仙人に於ては虎力「イヤ此場に至つて吾が神通力を見すべしと忽ち一振の劒を持つたることにして左方に發えて見えまそ五風樓と云ふ高樓へ登る樣子名々くに於ても如何あらんと樣子を見て居りまそる勿論此高樓には供物を供へ燈明を点じ名香を薫らしたるあとに致して虎力仙人に於ては白い行衣一枚にありまして劒を抜いて之を眉間に押當てたることにして頻りに祈りはじめた羊力鹿力の二人も虎力の後ろに付いて共々に祈り立てゝ居る中に今まで晴々たる空忽ち雲立つて參りまし

て俄かにグオー〳〵と風が出て來る樣子でございますから三藏大いに驚ろいて居る八戒沙悟淨に於ても　二人「是は大變だ降りさうな天氣になつて來た虎力仙人に於ては頻りに祈つて居ります悟空見て居たがイヤーやりやアがるお何うして雨に降られて堪るものか茲で雨に降られたり風が吹いたりすれば師匠樣負けて仕舞うと又毛を拔いて自分の身体を拵らへて三藏の側へ立たして置いた其身はスーッと風諸共に天上に至りました悟空樣子を見ると風の神は今風袋の口を開けて是から風を散かうと云ふ所でございますから　悟空「ヤイ〳〵ヤイ〳〵何をするんだ往けねへ〳〵　風神「イヤー是は何うも齋天大聖久しく御目に懸りません　悟空「ソンナことは宜いが何だつて風袋を開けやがるんだ　風神「何だつて開けるつたつて是は特約でございますから仕方がございませんから　悟空「誰と約束をし

たんた　風神「虎力仙人と云ふ男と約束をして劍を頭の上へ掲げて廻したら風を出して呉れ又二度目に劍を廻したら雨を降らせる三度目が雷鳴で四度目に劍を廻したら一同引取つて呉れと云ふので是は七八年此方特約になつて居るので　悟空「フゝ手前達は約束をしたから風を出したり雨を降らせたりするのか　風神「左様でございます　悟空「飛んでもねへことをしやがるならねへ　風神「ヘエ　悟空「おらねへよ　風神「いけませんか　悟空「いけねへとも、斯う〳〵斯う云ふ譯だ今度依奘三藏と云ふ人が手前達も知つてるだらう俺の師匠様だ其人が西天竺へ行くんだ車遲國と云ふ所へ通り掛つた所が國王が愚な奴で何事にも仙人の言ふことを聞いて佛法を全然捨てゝ御仕舞いなもつて師匠様は坊主だもんだから通さないッコで愈々爭いの末に雨競をして師匠様に勝つて雨を降らせたら通かに通

國を通さと云ふのだ　風神「ヘエー　悟空「今虎力仙人が劍を廻したつて貴様達は風を吹かせたり雨を降らせたりしちやア往けねへ强て出さなければならないと云ふなら出して見ろ、と耳の中から取出した如意棒を一振り振ると彼是れ九尺ばかりにした　悟空「サア何うだ撲殺して仕舞うぞ　風神「戯談言つちやア往けません其様なことゝは存じません……　悟空「又後は何うでもしてやらア手前達も出て來て入費も掛つてるだらうから……　風袋の口を結んで出しちやア往けねへよ、メレで虎力仙人と云ふ奴が所りの壇を下ると私の師匠様が祈るんだ俺の師匠様は祈ることは知らねへ併し御殺は上手だから御殺を讀む俺が如意棒を長くして夫の方へ向けるから其時には風を十分に出さなければ往けねへよ　風神「宜しうございます　悟空「手前ばかりちや往けねへ俺が是から方々へ廻ると暇が掛るか

ら手前から雨雲の方へも其話しをして風が出たら直ぐに雨をドン〳〵降らせなければ往けねへ又雷公の方へもさう言つて置け電光なんぞを又悪いのを使うと聞かねへよ光りの良いのを出せ　風神「宜しうございます私くしから電報をして早速さう致します　悟空「ソロ〳〵降りさうにおつたから手前早く行つて止めて来い降らしちゃア往けねへ　風神「雷公の方へは行くと云つても大変でございますから電信を掛けませう　悟空「電信が掛るか　風神「エヽ電信は彼奴が本元でございますから電報を打つて置けば宜しうございます何うも齋天大聖悪うございました御揚辨をなすつて……　悟空「手前は約束ではあるし知らねいことだから仕方がねへ袋が破れて居るぢやねへかと思つてるんでもが物が高へから袋の風神「ヘエ修繕をしやうと思つてるんでもが物が高へから袋の修繕をすることが出来ねへで……　悟空「ソイツは往けねへな

時々漏るだらう俺が其中に砂糖袋を持つて来て張つてやらうソレまで綴つて置け宜いわい　風神「宜しうございます　悟空「ぢやア何だせ雨の方へも雷公の方へも話をして四度目の金箍棒を振廻したらピタット止めるんだよ止めやうか遅いと片端から撲殺そよ　風神「お前さんお氣が荒くつて往けねへ無闇に撲殺す〳〵と……　悟空「難作ねへ手前達を殺すのはソレぢやア駄んだぞ委細のことを言付けて悟空下界へ降つて来た毛を元の通りに殺めて師匠様の側に居る虎力仙人頻りに祈つて宜い塩梅に風立つて来た様子でありました所ピタリッと風もなくおつて清々として来たから虎力大いに驚ろいて一生悪命に劍を廻して居る殺ら劍を廻しても生けおい中天の方では齋天大聖が来たのかい　風「来たともやつちゃア往けねへ風人ださうだ今雨なんぞを降らせると齋天大聖怒つて来る、奴が怒

つて來ると始末に往けぬへ　雨「電悟を懸けたかい　風「電悟は先刻掛けた中天の方では仕度をして居るけれども併し雨も降らかければ風も止んで仕舞ひました電公かんぞは大皷を横にして寢て居やがる　風「電光は來て居るかい　電「來て居るよ

○「何だぜ三藏と云ふ人が祈り始めて齋天の阿兄が如意棒を振廻したら直ぐに取掛るのだよ　電「必得た　風「一同役割は捕つてるかい　電「捕つてるよ　風「電公々々寢て居ちやア困るぢやねへか齋天の阿兄は病癖持だから何をするか知れねへ　電「弱つたなア……御話別れて虎力仙人は一生懸命に祈ると雖ども雨も降らなければ風も出ない流石の虎力羊力鹿力の三人悲とく慨いて居る悟空側から大音を揚げて　悟空「サア〳〵　仙人降りた〳〵　其樣なことで中々農民を助けるゐとが出來るものか此度は御師匠樣が昇るんだ據ころかく三仙に於ては其儘に五

風樓と云ふ高樓を降りて來て宮に藏いて居る悟空は又虫にかつて三藏の耳の側へ來て　悟空「貴僧は壇へ御昇りなさつて御敎を讀んだら宜しうございまを祈ることも何にも要りません御敎が飽きたら都々逸でも端歌でもおやんなさい　三藏「其樣あゐとが出來るものか　悟空「搆やアしません寢言でも何でも宜しうございます雨も降り風も出るのでございますること云ふので三藏は其儘にして祈りの壇へ登りました何うも眞大なる飾物がしてあります名香を薰しましたることにして三藏一生懸命に敎文を讀んで居る樣子、虎力羊力鹿力の人々に於ては何しに雨かどの降る氣遣ひはない風の出る氣遣ひはないと思ふて居る國王も彼の併が何が出來るかと思ふて居る其中に悟空忽ちの間如意棒を取出して名々へ見えざるやうにして天へハッと差出した　風神「見えた〳〵　雨「見にたかソレ風殺だ一

同手を貸せ其様おこつちやア往けねへ……何の袋を幾つ持つて來た　風「六十三持つて來た　雨「ソイッは往けねへ吹きやうが少ねへと齊天の阿兄に怒られる破れて居るのは仕方がねへサア〳〵風の神ッかもしあくつちやア往けねへ袋の口を十分開けたものだからブゥーッ、いや何うも大風の吹起りました様子虎力を始め名々に於ても是はとばかり驚いて居る其中に風「見えたく　西「見えたか　風「サア雨だく〳〵と云ふとザアー〳〵と何うも降らせるの何のつて今度はもう三階總出でどいまそから其雨の勢しいと　風「オイ〳〵何をして居るんた雷公は……　雷「今揮を締めて居るんだ　風「虎の皮の褌おんどは早く締めて置くが宜いぢやねへか　雷「斯う早くはあからうと思つた　風「雷光は何うした　電「オイ來た電光はやり始めた、ピカ〳〵ピカ〳〵ダワラ〳〵グワラ〳〵ザアー、何うも其の

大雨大雷大風でございまそかお全然五風樓に居りまを入やに於てはビッショリ濡れて居る三藏も心の中に不思議ありと思いながら頻りに數文を讀んで居ると其雨の降方と云ふものは容易あらぬあと名々に於ても大きに驚いて是れ佛力の宏大なる所なりと國王を始めとして驚かぬ者はない位でございまし其中に悟空先づ一旦は雨を降らせ風を起して快しと思いましたから如意棒をクル〳〵と廻そと　風「サア仕舞へ〳〵……ア、疲勞れた何うも高貴にはして居るけれども此様に忙しい思いをしたことはねへぜ　雨「何うも御互いに御苦勞様だつた　雷「何うだい一時の騒ぎは大變だつたお飯を食ふ間もねへくらゐ今までの間大雨大雷であつたのがピタリッと止んだ孫悟空には此時に至りまして三藏へ又何やら申入れた三藏ビッショリ濡れて在そあり　三藏「如何に三仙へ申入れる吾れ佛

力を以て事を爲し佛法を信じて事を爲す時には斯の如きものありとある國王に於ても始めて其迷夢を覺せる位でございまを然る所此期に及んで虎力羊力鹿力の三仙人は是れまでと思いまして茲に再たび三藏へ對して互ひに法力を較べんことを望む、

第十二席

エ、申上げまを、此所で三仙人と孫悟空が術を較べる所がございますが是は重複に渡りまをるやうなものでございまをから此邊は大略と致しまを固より此三仙人虎力と云ふのは虎の化物羊力は羊の化物鹿力は鹿の化物でございます悟空はソレを存じて居りまをから遂に此三仙人の命を絶ち其正体を現はしたる所を見ると實に何うも驚くべき變化でございまをされば國王にも是までの夢も覺め始めて眞心に歸りましたやうあも

の三藏の手を取　國王貴僧此國へ來らずば吾れ此國を魔國にあさんと爲したり誠に唯今に至り孫行者の神通力を以て三仙人と見えたる者斯ばかりの變化たることを知れり此上共に永く此國に留まり能く佛法を廣め願はくは吾も共に佛道へ導いて給はれ〻三藏の袖へ縋つて國王が頼みましたなれども三藏固より此國へ留まるべきものでない、西天竺へ行くことは私事ならを勅命に依つて參る次第でございまをから右の由を述べ事運國の王に於ても已を得ざるの次第でございますから茲で名々を辭應し三日の間大法會を致し就いては一旦囚人同様に致したる五百人の僧を呼迎へ是までの間潰してありましたる寺々を再興なし尚は其法の大いあるみとを知らしめた所が一且退散を爲したる五百人の僧右の由を聞いて唯悟空の神通力と其情けとを喜ぶ一同立歸りましたソコで悟空は名々へ渡

して置いた毛を受取り元の通り身内に藏め三日の法會が相濟んで愈々此車遲國を立出ると云ふことにありました國王より

して莫大の送り物がありと雖ども三藏を始めとして三人の弟子は右樣の物を受けるやうあるものでない其儘にして此國を立出でるあとになりました國王より遲り手形を送られて車遲國を後に致して三藏は龍馬に打乘り悟空八戒沙悟淨御供を致して西を指して參りました所ろ三日ばかりの間別段に申上げるあともあく一日人家のないやうな所へ出で來つて見ると蒼茫海原の岸に出ました船もなければいた何ちも陰々渺々たる橋もない三藏之を御覽にありまして　三藏行者是は何と云ふ大河であるか　悟空左樣でございます何も恐しい大きな河があつたものでございます御待ちなさい一寸樣子を見て來ますから外へ入しつちやア往けませんと名々を待たして置いて悟

空道を急いで參つて見ると大きな岩の上に一本の樁杭が立つてある縱八百里横七百里通天河としてある　悟空是は大變な河だ俺達が通力を以て雲へ乘つて越せば八百里だつて千里だつて搆ぬへが師匠樣は肉体だから雲へ乘ると云ふことが出來ないと何うか一つ工風をしなければならぬへと考へながら歸つて來た　悟空エー御師匠樣行つて參りました　三藏何と云ふ河だ　悟空縱が八百里で横が七百里ある通天河と云ふ川でございます　三藏アーム通天河何うも越を譯にならんかな　悟空イエ此樣な大きな川でございますから橋はございますまいが船のないと云ふあとはありません何處か渡を所があるに相違でございませんから御心配なさいますな何處へ行つて今夜は泊つて川を越ることを考へませうとソレから彼是れ十里ばかり參りますと一つの村があります　悟空宜い搆ない此處に

村がある此村で聞いたら大抵何處から船が出る位は分るだらうと來ると冠水門で大層立派な家がある　悟空「此處は名主の家でもございませう御師匠樣貴所這入つて御願みなさい私くし共は面が此樣ですから大抵な者は驚いて取合いません貴所が行つて御願みになると一番早うございませうでもあい願間々〳〵申うすやうなら其時には手前が參りますから　三藏「尤もさうだと馬を下りて三藏門内へ這入つた　三藏「少々願む　男「ハイ御入來あさいまし、オヤ御出家でございますか何方から御入來で　三藏「拙僧は唐朝の者で西天笠まで參るものである　主人が居るから一寸面會をしたいものだ　男「ハアさうでございますか……エヽ且那樣御出家樣が御座つて貴所に會いたいと仰有います　主人「アヽ左樣か」出て來たのを見るともう四十恰好一人は五十四五にもありませうか、二人共大層品行の良い

大家の主人と云ふ樣子　主人「是は御僧能く御入來なさいました何か御用でございますか　三藏「是は兩名とも當家の主人か主人「手前は當家の主人陳澄と申します者是は舍弟で新家を出して居ります陳清へ申します者で　三藏「アヽ兄弟でお在か私は唐朝より西天笠まで參る依奘三藏と云ふ者である新天河と云ふ河まで參つたが何分にも越すこともならず難義を致す何方へ宿る所もなく大家を見込んで御願ひ申すが一夜の宿を御貸し下さることにはなりますまいか　陳澄「ハア、ソレは〳〵西天笠へ御出になりますか速がに御宿を致し又齋飯を參らせ樣々御願致すべきでございますが家内に容易ならぬ取込があります御斷り申したら定めし御困りでもございませうから御宿を致しますが何うか御無禮の段は……　三藏「イヤソレは別段に御願を受けいでも雨露